



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | The Northern Review No.39 全1冊                                                     |
| Citation         | The Northern Review, 39                                                           |
| Issue Date       | 2019-11-30                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/76175">https://hdl.handle.net/2115/76175</a> |
| Type             | journal                                                                           |
| File Information | NR39_all.pdf                                                                      |



ISSN 0387-2661

# THE NORTHERN REVIEW

No. 39

故 高見敏子先生 追悼号

北海道大学英語英米文学研究会

2019



# THE NORTHERN REVIEW

No. 39

故 高見敏子先生 追悼号

北海道大学英語英米文学研究会

2019



## 目 次

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| 学ぶ楽しさを伝える英語多読学習：2009 年の公開講座から |    |
| .....原 田 真 見 .....            | 1  |
| 日本語と英語、再発見 — 「人間言語」という視点      |    |
| .....奥 聡 .....                | 5  |
| 拡張現実の時代における自由と偶有性             |    |
| — インターネットが私たちから奪うもの           |    |
| .....山 田 義 裕 .....            | 31 |

---

|                      |    |
|----------------------|----|
| 高見敏子先生業績と近年の活動一覧     |    |
| .....土 田 映 子 .....   | 53 |
| 高見敏子さん業績一覧等の作成を終えて   |    |
| .....土 田 映 子 .....   | 57 |
| 高見敏子さんを悼む            |    |
| .....浜 井 祐 三 子 ..... | 61 |

---

会 則  
編集後記



# 学ぶ楽しさを伝える英語多読学習：

2009 年の公開講座から

原田 真見

高見敏子先生が北海道大学で 2005 年に始められた英語多読多聴学習の概要や授業での具体的な取り組みについては、外国語教育センター 外国語教育将来構想ワーキンググループ 鈴木志のぶ・辻本篤 編『平成 29 年度 外国語教育における ICT 活用／自律的教育活動の発展』に収録された高見敏子・浜井祐三子「北海道大学における英語多読多聴学習の 12 年の歩み」(2018 年 3 月)に詳しい。本稿では少し視点を変え、高見先生と私が 2009 年に公開講座として行った英語多読学習のセミナーを振り返りながら、普段英語に触れる機会が少ないと思われる人の英語学習全般や英語の学び直しにおける多読(多聴)学習の可能性について紹介したい。なお、高見先生担当回のすべての資料や受講者のアンケート結果を私が把握している訳ではなく、また、実施後 10 年の時間が経過していることもあり、正確な記録となりえないことは最初に断っておかなければならない。それでも、高見先生が熱心に取り組んでこられた多読多聴指導への思いを伝えるひとつの事例として、この機会に振り返っておきたいと思う次第である。

2009 年の当該セミナー「英語圏の児童向け学習図書で学ぶ英語表現」は、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院が毎年一般市民向けに行っている公開講座のひとつとして開催したものである。英語多読学習の楽しさを学外の方にも紹介したいとの高見先生の強い気持ちから実現した。私自身は、高見先生に助言をいただきながら北大の英語演習クラスでの多読指導を始めて数年経ち、少し指導にも慣れ、またこの学習方法の面白さを感じていた頃だった。高見先生と同様に私も北大生向けの授業としては多読学習の効果や意義を実感していたとは言え、大学生に比べ普段英語とあまり縁のない受講者が多くであろう公開講座で多読を扱うというのは、なかなか挑戦的な試みだったが、だからこそこれは多読学習の可能性を考えるよい機会になるのではないかと思い、参加させていただくことにした。

セミナーは全 8 回で、高見先生と私がそれぞれ 4 回ずつ担当した。全体の大きな方針としては、「こんな面白い英語学習法がありますよ」ということを紹介することに主眼を置いて銘々が担当回の講義を組み立てた。また、講義は各回の前半に留め、後半は講義で紹介したシリーズを中心に実際に多読図書を読んでもらう時間とした。公開講座の受講者には、もちろんその年度毎に設定されるテーマに興味を持って来てくださる方もいるが、その一方で、テーマに関わらず毎年出席してくださるいわゆる常連の方もいる。後者のタイプの受講者が、例年とはまったく趣の異なる今回のセミ



ナーに面食らうことも想定されたため、英語に関心のない人にも何かしらの興味を持ってもらえるように、「語学学習」としての多読だけではなく「文化学習」としての多読の側面も紹介するように苦心したつもりである。

すべての回の記録が残っている訳ではないので抜粋となるが、下記のようなテーマを設定した。

- 英語学習における「やさしい本」の活用法
- 絵本で垣間見るイギリスの日常生活
- 地域色豊かなオーストラリアの学習絵本
- 英語で読み直してみる童話

「英語学習における『やさしい本』の活用法」は、高見先生が準備した初回のガイダンス講義である。受講者の英語に対する関心度を確認しながら、多読学習の意義や取り組み方について丁寧な説明を行った。なお、この際の確認により、受講者の7割が英語学習に関心を持っており、特に、趣味や海外旅行の時の手段として英語を勉強している／したいと考えていることが分かった。一方で、残る3割弱は英語学習に特に関心を持っていない受講者であった。講師である私たちはこのデータを念頭に、後の講義を調整していくことになる。高見先生の初回ガイダンスの具体的な内容は、次のようなものであった。

#### (1) 基本的な多読図書シリーズの紹介

Penguin Readersのような英語学習者向けのスタンダードなもの  
英語圏の児童向け図書

#### (2) 従来型英語学習における「インプットの不足」

アジア各国と日本の英語教科書比較

#### (3) 多読学習法（「100万語多読」）について

やさしい本を読む効果

挿絵の効果

北大の授業における学生の反応

多読の短所（注意点）

#### (4) 「やさしい本」の活用法

「読む」「聞く」「書く」「話す」

#### (5) 北大図書館の利用方法

このセミナーでは、有効な英語学習方法として多読学習を紹介する、というのが大きな目標であったため、(2)で、多読学習をほとんど知らない受講者に対して、従来型の学習法で一番不足しているのが量的なインプットである点をデータを示しながら

説明した上で、(3)(4)において、多読図書の文章から実例を示しながら、「やさしい本」をたくさん読む勉強法の効果を説いた。さらに、関心を持った受講者がすぐに多読に取りかかれるように、(5)において市民が北大図書館を利用するための手続きまで詳しく説明したのは、その人にとって何が必要な情報か、何に困りがちなのか、相手の立場に立って考え丁寧な工夫をする高見先生ならではの配慮であったと言える。ちなみに(3)(4)は、多読学習をまったく知らない人を想定した説明だったが、どのような学習法であっても、まず、その効果や狙いについて十分に理解した上で取り組むことが重要であることは言うまでもない。そのため、この公開講座後、私は北大の多読授業においても、この高見先生の初回ガイダンス資料を活用させていただいている。

初回ガイダンスを踏まえた上で、セミナーの2回目以降は、(1)さまざまな多読図書シリーズを紹介しながら、(2)簡単な英語のフレーズについて勉強し、かつ(3)多読図書を利用して外国文化を学ぶ、といった構成で講義を行った。イギリスの日常生活については、高見先生がイギリスの小学生向けの読み物を紹介しながら、アメリカ英語とイギリス英語の違い、挿絵を見ながら単語の意味を類推する方法、単純な繰り返しや押韻が多く基本表現を覚えやすい子どもの本ならではの長所について説明した。説明の合間に、紹介してきた文章に関する英語チェックの問題が出題されるので、気楽な講義ながらも実は受講者は気を抜けない構成となっている。一方で、作中で展開するエピソードや挿絵を利用しながらイギリスの日常生活についての話も盛り込まれ、「英語学習」以外の面での多読の楽しみ方も提供した。私が担当したオーストラリアの多読図書紹介の回でも、子ども向け図書を読んで基本動詞のおさらいをしつつ、こうした国々で子どもたちに伝えようとしている価値観についてその一端を知ることができるといった話をした。

毎回読書の時間を設け、実際に子ども向けの本を受講者に読んでもらったが、前半で様々な着目ポイントを紹介しておく、普段から多少英語を勉強している人でもいろいろな気づきがあったようである。高見先生は受講者からのフィードバックも大切にしていたため読書後に英語についての質問を積極的に寄せる受講者も多く、それが次の講義や読書の発展につながっていった。こうした受講者からのフィードバックは、北大生向けの授業でも大いに役立ったと言える。北大の授業でも最初の数回はごく易しい本から読ませるようにしているが、それによって「英語の本を簡単にすらすら読む」ことに慣れはしても、「易しすぎるから英語そのものの勉強にはならない」と考える学生もいる。公開講座受講者からのフィードバックを参考に、物足りなさを感じる学生には、本を読みながら「基本動詞や前置詞の使い方のパターンを集める」、「童話ならではの決まり文句を探す」といった課題を付け加えてみたところ、子どもの本ならではの分かりやすくそれでいて多様な表現に目を向けるようになった学生も多い。多読学習はなによりもまず自由に読書を楽しむことが肝心だが、この公開講座での試みのように、多読用図書を読む際の語学面／文化面での様々な着眼点を提示す

ることは、学習者が自分に合った読書の楽しみ方や勉強法を選択し拓げていくことにつながるだろう。

属性の異なる受講者相手の公開講座での多読紹介は難しくはあったが、実験的に様々な試みをすることもできた。それによって私たち自身が改めてこの学習法への理解を深めることができたと思う。

#### (付記)

高見さんは、いかにも高見さんらしく「忙しいと思うけれど、もしよかったら」と言いながら私をこの公開講座の企画に誘ってくれました。私にとっては、高見さんと打ち合わせをしながらセミナーを進めていくこと自体がとても楽しい作業でした。高見さんも公開講座の企画時から終了時まで、終始存分に楽しんでいました。講座最終日に受講者に修了証を渡す高見さんはいつもに増してニコニコ顔だったのを覚えています。高見さんについて思うこと・語りたいことは尽きませんが、何を思い出してもあの笑顔が目に見え、明るい笑い声が聞こえてきます。

# 日本語と英語、再発見

## —「人間言語」という視点<sup>1</sup>

奥 聡 (Satoshi Oku)  
satoshio@imc.hokudai.ac.jp

### 1. はじめに

外国語を学習する際に、誰もがその学習言語と自分の母語との違いに気がつくでしょう。そして、そのような違いを乗り越えようとするのが外国語学習の1つの醍醐味であると思います。しかし、同時に母語と異なる外国語の特徴を理解し、身に付けることは決して簡単なことではなく、多くの外国語学習者にとって大きな壁ともなります。

一方、1950年代中ごろから始まった、新しいタイプの理論言語学では、言語間の表面的な違いの背後にある共通の特徴が大きな興味の対象になっています。それは人間が生まれながらにして持っている頭の中にあることばを操る仕組みそのものを明らかにしたいという大きな目標を持った研究分野だからです。本稿では、英語母語話者と日本語母語話者の頭の中にあることばを操る仕組みを具体例として、それらが、ある面では非常に似ている、あるいはほぼ同じである、ということを論じたいと思います。第2節からの具体的な議論に入る前に、大切な概念の区別を1つ紹介します。

どの研究分野にも共通することですが、ある基本的な用語や概念に関して、それをどのようなものであると考えるか、定義や解釈、あるいは研究者の「立ち位置」によって、その実体が大きく異なることがあります。「言語」あるいは「言語能力」という概念も同様です。「言語」とはいったい何を指す表現として使われるのか。人によって、あるいは状況によってもさまざまに異なってくるでしょう。もっとも一般的なイメージとしては、「日本語」「英語」「中国語」など名前のついたものであり、たとえば「日

1 本稿は、2014年9月4日北海道大学/WREAC Tandem Language Learning Program(北海道大学スタディ・ウィーク)での講演内容に加筆修正を施したものです。講演に参加し、貴重な質問・コメントを下された皆さまに、そして、本講演を含むスタディ・ウィークを準備くださった関係者の皆さま、特に司会を担当してくださった宮下雅年先生に、感謝いたします。なお、本稿は、国際広報メディア研究科立ち上げ当初から言語系教員チームのメンバーとして献身的に貢献してくださり、2018年10月19日にご逝去された高見敏子先生に捧げたいと思います。本稿に何か思わぬ不備があれば、その責任は全て筆者に属するものです。

本語」とはそれを母語とする人たちが、話したり書いたりすることによって現れてくるもの（音として聞こえるもの、文字として読めるもの）のことで理解されるかもしれませんが。しかし、「言語」という概念にはそのような一般的なイメージとは異なるものを表すこともあります。事故や病気で脳の機能の一部が失われ、いわゆる「失語症」になる人がいます。そのような症例に対して、「言語を失っている」「言語能力が損傷している」という言い方することがあります。<sup>2</sup> この場合の「言語」や「言語能力」は、口から出てくる言語表現のことではなく、言語表現を生み出したり、あるいは理解したりする頭の中の潜在的な「能力」あるいは「機能」のことを指しているでしょう。1950年代半ばから始まった理論言語学における研究対象は、まさにこのような意味での頭の中にある認知機能の1つとしての「言語」「言語能力」であり、しばしば「I言語」と呼ばれます。一方、表に出てきた、耳で聞いたり目で見たりすることができる言語表現は、「E言語」として、両者を明確に区別します。<sup>3</sup> この区別は大変重要で、近代物理学の世界で、実際に起こる「個々の具体的な物理現象」とその背後にある「普遍的な物理法則・原理」とを明確に区別することが重要であることと同じです。

「E言語」はそれを生み出したり理解したりする頭の中の「I言語」を解明していく上での重要なデータ、情報源の1つとなります。頭の中を直接のぞいてみても「言語能力」を直接見ることはできません。したがって、「I言語」によって生み出される、直接見たり聞いたりすることができる「E言語」を手がかりに「I言語」の正体を明らかにしていこうということになります。つまり、「E言語」は研究を進めていく上での重要な情報源の1つではありますが、「E言語」そのものが明らかにしたい本当の研究対象ではないのです。これはちょうど、たとえば宇宙物理学者が太陽の内部で何が起きているかを研究する際に、地球上から直接観察できる太陽から発せられている様々なデータを利用することと同じです。地球から確認できる太陽の表面のデータの分析そのものが最終的な目的ではなく、それを利用して太陽の中でいったい何が起きているかを明らかにするのが究極の目標となるわけです。同じように、頭の中で実際に何が起きているか（I言語）を直接観察することはできませんが、E言語を利用して頭の中の言語機能を研究することは可能なのです。

「E言語」のレベルで見ていると、人間の言語は一見無制限に見えるほど多種多様です。ところが、「I言語」のレベルで丁寧に見ていくと、人間の言語はどれも非常によく似ていること、あるいは全く同じ原理や規則に従っていることが分かってきま

---

2 このような「失語症」の例を用いて、理論言語学の分野でいう「言語」「言語能力」という概念を説明する方法は、John Whitman 氏（国立国語研究所・コーネル大学）から教えてもらいました。

3 I は intensional/internal/individual の I。E は externalized の E。（Chomsky 1986）

す。<sup>4</sup> 本稿では、日本語と英語という、歴史的にも系統的なつながりがなく、言語類型論的にも大きく異なっていると考えられる2つの言語を具体例として、その驚くべき共通性を示してみたいと思います。以下、第2節では複合語の作り方を例に、第3節では発音の規則を取り上げ、両言語話者の共通性を論じます。第4節は文を組み立てる仕組みを、そして第5節では意味と語用をつかさどる仕組みを考えます。第6節はまとめとして、言語に対する生物学的視点を持つことの意味を考えてみます。

## 2. 複合語の作り方

現在の理論言語学の標準的な考え方の1つとして、人間の頭の中の言語能力はいくつかの部門に分かれていて、それぞれ独立の機能を果たし、相互に連絡を取り合いながら全体としての言語能力になっていると仮定されています。このような下位部門のことを「モジュール」と呼びます。そのようなモジュールの1つとして、まず、辞書 (mental lexicon) が挙げられます (以下、「レキシコン」と呼ぶことにします)。<sup>5</sup> この頭の中のレキシコンは、普通の辞書と同様に、個々の単語や形態素に関して、どのように発音されるか、どのような意味を持つか、どのような文法的な振る舞いをするか、といったそれぞれの要素に固有の情報が蓄えられています。同じ言語共同体の構成員でも1人ひとりが知っている単語の種類や量には違いがありますから、個々人のレキシコンも少しずつ異なっています。しかし、同じ言語共同体の構成員であれば、意思疎通にあまり困らない程度にはレキシコンの内容も共通しているといえるでしょう。

さて、人間が持つ頭の中の辞書・レキシコンには、紙の辞書や電子辞書などとは大きく異なる特徴があります。それは、常に新しい単語を作り出したり理解したりする仕組みを備えているということです。そしてこのような仕組みには、日本語母語話者が持っているレキシコンと英語母語話者がもっているレキシコンとで多くの共通点が見られるのです。以下、この節では名詞の複合語を作り出す仕組みに注目して、英語話者と日本語話者との共通点を見てみたいと思います。

### 2.1 創造性と主要部後置

日本語母語話者も英語母語話者も、たとえば (1) のように、すでに存在している単語を2つ組み合わせることで新しい複合語を作ることができます。あるいは、複合語を構成している個々の単語を知っていれば、その複合語を初めて聞いたとしても、おおよ

---

4 この考え方を分かりやすく論じたものとしては、Baker (2001), Chomsky (1986, 2007), 福井 (2012), Pinker (1995), 上田 (2004) などが参考になります。

5 個々の単語を用いて文や句を組み立ててゆく頭の中の仕組み (統語規則 syntax) と頭の中のレキシコンとを分けて考えることは、Chomsky (1965) 以来、重要な区別であると考えられています。

その意味を推測し理解することができます。<sup>6</sup>

- (1)      a.          携帯 + 電話          mobile + phone  
            b.          タンデム + 学習      tandem + learning

おそらく 1980 年代以前の日本語母語話者の脳内レキシコンには、「携帯電話」という複合語は存在しなかったでしょう。あるいは「タンデム学習」という複合語は、それをレキシコンに持っていない人も少なくないかもしれませんが、教われればすぐに理解して、使えるようになるでしょう。英語の mobile phone や tandem learning という複合語に関しても事情は同じでしょう。つまり、日本語母語話者も英語母語話者も、必要に応じて既存の単語を組み合わせる新しい複合語を作ることができる、理解することができる、という点で同じ言語能力を備えていると言えます。個々の単語の意味を知っていれば、それらからなる新しい複合語を初めて聞いても、多くの場合、瞬時にその意味を理解することができます。たとえば、「ワニバナナ」という複合語。<sup>7</sup> 以前に聞いたことがなくても「ワニ用のバナナ」あるいは「ワニの形をしたバナナ」など「バナナの種類」だろうとすぐに理解できます。その意味で、人間の頭の中のレキシコンは大変創造的であるといえるのです。

さて、日本語と英語の複合語にはさらに大きな共通点が 2 つあります。その 1 つ目を以下で、2 つ目を第 2.2 節で紹介します。たとえば、「電話」と「携帯」という既存の単語を組み合わせる場合、その順序がとても重要となります。「携帯電話」という順序であれば、それは「電話」の一種であると理解できますが、「電話携帯」という順序では、「電話」の一種であると理解することはとても難しいでしょう。「タンデム学習」と聞けばそれは「学習（方法）」の一種であるとすぐに分かりますが、「学習タンデム」と言われると「学習（方法）」の一種と解釈するのは難しくなります。これは、文脈をいくら整えてもうまくいきません。次の例を見てみましょう。

- (2)      連絡がつかなかったけど、どうしたのですか？  
            a.          携帯電話をなくしてしまったのです  
            b.          電話携帯をなくしてしまったのです

(2) の例では、なくしたのは「電話」であることは、文脈からも一般常識からも明ら

6 新しい複合語が、その言語コミュニティにおいて多くの人に共有され定着し、長く使われるようになるかどうかは、さまざまな社会的な要因が複雑に関わってくる問題であり、本稿では扱いません。母語話者として 1 人ひとり個人のレベルで、新しい複合語を作ったり理解したりする能力が備わっているということがここでのポイントです。

7 この例は、大津（2004）にあります。



かです。それにもかかわらず、(2b)の「電話携帯」を電話の一種と理解することは相当難しいでしょう。つまり、複合語の語順が担っている意味解釈上の情報は、発話場面の文脈情報や一般常識よりも、強力であるといえます。英語の複合語の場合も事情は同じです。つまり、複合語に関して、日本語話者の頭の中にも英語話者の頭の中にも、(3)のような強力な規則が存在すると仮定することができます。

(3) 主要部末端規則

XとYからなる複合語 [X Y] の主要部はYでありXではない（つまり、複合語全体の特性はYが決める）

日本語母語話者の脳内レキシコンも英語母語話者の脳内レキシコンも、既存の単語を利用して必要な複合語を作るという柔軟な創造性を持っている一方で、主要部末端規則という厳しい制限にも同時に従っています。この点において、日本語話者の頭の中の言語能力と英語話者の言語能力は、全く同じ仕組みを持っているということになります。

主要部末端規則に関して1つ注釈をします。たとえば、日本語と英語しか知らないと、複合語の主要部末端規則(3)は、あたりまえのこと、人間の言語であればどの言語でも当然のことになってしまうかもしれません。しかし、世界の言語には、複合語が「主要部先端」であるものもあります。つまり、[X Y]という複合語において、(その全体の性質を決める)主要部がYではなくXである言語もあるのです。<sup>8</sup>

|     |        |                              |         |
|-----|--------|------------------------------|---------|
| (4) | タイ語    | <u>thoorasap</u> muruuthuruu | [電話携帯]  |
|     | ベトナム語  | <u>diên thoại</u> cầm tay    | [電話手持ち] |
|     | ヘブライ語  | <u>telefon</u> -selurari     |         |
|     | フランス語  | <u>telephone</u> portable    |         |
|     | ルーマニア語 | <u>telefon</u> mobil         |         |

これらの言語でも既存の単語から必要に応じて複合語を作り出す創造性を持っているという点は、英語や日本語と同じと考えられますから、複合語を主要部末端型とする規則を持つか、主要部先端型とする規則を持つかは、生まれた後の言語環境によって決まる言語能力の「可変部分」であると考えられます。<sup>9</sup>

8 この例は、窪菌（2002）から採用しました。

9 日本語の複合語には、主要部末端型ではないパターンがあります。並列複合語（coordinative compound, dvandva）と呼ばれるもので、[X Y]がYの一種ではなく、[XとY]と解釈されるものです。

(i) 少年少女（boy-girl）‘boys and girls’（not ‘boyish girl’）

(ii) 新郎新婦（bridegroom-bride）‘bride and groom’



## 2.2 「単語らしさ」の秘訣<sup>10</sup>

日本語母語話者と英語母語話者の複合語に関する言語知識のもう1つの共通点は、複合語をひとまとまりの単語らしく発音するための方法にあります。まずは、日本語の例を見てみましょう。標準的な日本語では、「大学」という単語は単独で発音すると「だいがく」のように平板なイントネーションで発音されます。また、「北海道」という単語は「ほっかいどう」のように、「か」から「い」にかけてピッチが下がります。ところが、この2つを組み合わせると複合語にすると、単独で発音されていた時のイントネーションとは異なり、(5)のように発音されます。

(5) 北海道大学                      ほっかいどうだいがく

つまり、「ほっかいどう」の部分は平板イントネーションで発音され、「だいがく」の部分は、「だ」から「い」にかけてピッチが下がるように発音されます。もしこれをそれぞれの単語のもとのイントネーションのままで読もうとすると、「ほっかいどうだいがく」となり、複合語としては大変不自然になるでしょう。これは「北海道大学」という複合語に特有のものではなく、多くの例に見られるパターンです。日本語の例をもう2つ見てみましょう。以下、(6)と(7)において(a)(b)はそれぞれが単独で発音された時のイントネーションで、(c)は複合語になった時のイントネーションです。<sup>11</sup>

|     |    |      |                                     |
|-----|----|------|-------------------------------------|
| (6) | a. | 携帯   | け <u>い</u> たい                       |
|     | b. | 電話   | で <u>ん</u> わ                        |
|     | c. | 携帯電話 | け <u>い</u> たいで <u>ん</u> わ           |
| (7) | a. | 旅行   | り <u>ょ</u> こう                       |
|     | b. | 海外   | か <u>い</u> がい                       |
|     | c. | 海外旅行 | か <u>い</u> が <u>い</u> り <u>ょ</u> こう |

ここで観察できる共通点は、複合語の前半要素を「高いピッチ」で発音し、後半要素を「低いピッチ」で終えるというパターンです。

大変興味深いことに、英語においても、複合語は句とは異なるイントネーションパターンを示します。たとえば、mobile phone は、通常の文脈では MOBILE phone のように前半要素を「強く」、後半要素を「弱く」発音します。中にはこの発音の違い

10 以下の議論は、窪園（2006）を参考にしています。

11 「北海道の大学」のような句（phrase）の場合は、複合語と異なり「北海道」「大学」がそれぞれ単独で持っている本来のイントネーションパターンが保持されます。これは「携帯できる電話」や「海外への旅行」のような句の場合も同様です。イントネーションパターンの変化は複合語に特有の現象といえるでしょう。

によって句とは異なる意味を担う複合語もあります。

- | (8) |             | 複合語               | 句               |
|-----|-------------|-------------------|-----------------|
| a.  | green house | GREEN house 温室    | GREEN HOUSE 緑の家 |
| b.  | high chair  | HIGH chair 子供用高イス | HIGH CHAIR 高いイス |

green house は「強・強」と発音すると、句として解釈され「緑色の家」という意味になりますが、「強・弱」と発音すると、複合語として解釈され「温室」という意味になります。high chair の場合も同様のパターンで複合語としての意味と句としての意味を区別します。

さて、日本語は一般的に「ピッチアクセント言語」と呼ばれ、音の「高低」によってアクセントの区別をしていると考えられています。一方、英語は「ストレスアクセント言語」と呼ばれ、音の「強弱」によってアクセントの区別をしていると考えられています。<sup>12</sup> しかし、複合語の前半要素を後半要素よりも音声的に際立たせる（あるいは後半要素を音声的に弱く発音する）ことによって、その複合語をひとまとまりの「単語らしく」発音するという点は共通です。つまり、日本語母語話者も英語母語話者も、頭の中のレキシコンにある、複合語を 1 つの単語らしく発音するための規則が共通しているということになります。<sup>13</sup>

複合語をつかさどる頭の中のレキシコンに関して、日本語母語話者と英語母語話者との間に次のような共通点があることが確認できました。

- (9)
- a. 新しい複合語を創造し理解する仕組みを持っている
  - b. 複合語は基本的に主要部末端型である
  - c. 複合語を 1 つの単語らしく発音するため「強・弱（または高・低）」のイントネーションパターンを持つ<sup>14</sup>

12 窪菌・太田（1998）、Ladefoged and Johnson（2014）を参照。

13 違いもあります。英語の複合語では、後半要素は全体的に「弱く」発音されるのが通例ですが、日本語の複合語では、上記の例で見たように後半要素の最初の音節は「高く」発音されそこから急激に「低い」ピッチへと移行します。

14 日本語の複合語のイントネーションパターンに関して、複合語にたまたま共通のイントネーションのパターンがあるだけで、そのようなイントネーションのパターンを支配している「規則」が頭の中にあるわけではない、という反論も考えられるかもしれませんが。つまり、たとえば「海外旅行」というイントネーションは確かに「強・弱」となっているが、それはその複合語を聞いたそのままの発音をただ覚えているだけで、イントネーションの規則が頭の中にあるわけではないという考え方です。これに関しては、白勢・桐谷（2001）が、未知の複合語を用いた実験で、はじめて見た複合語に対しても、無意識のうちに「強・弱」という複合語のイントネーショ

日本語母語話者と英語母語話者の言語能力は、上記の点に関しては共通であると言えるでしょう。<sup>15</sup>

### 3. 発音規則

外国語の発音には多くの人が苦勞すると思われますが、日本語母語話者も英語母語話者も頭の中に共通に持っている発音規則がいくつもあります。以下では、その中でも代表的な例として、「同化現象 assimilation」と「母音弱化・母音脱落 vowel reduction / vowel deletion」を紹介します。

#### 3.1 同化現象

英語の規則動詞の過去形は、-(e)d とつづられますが、以下で見るようにその発音は一樣ではありません。

|      |    |           |    |           |
|------|----|-----------|----|-----------|
| (10) | a. | robbed    | b. | stopped   |
|      |    | begged    |    | kicked    |
|      |    | buzzed    |    | kissed    |
|      |    | [d] (有声音) |    | [t] (無声音) |

(10a) の単語の過去形の形態素は、[d] という有声音 (voiced: 声帯を振動させて出す音) であるのに対して、(10b) では、[t] という無声音 (voiceless: 声帯を振動させずに出す音) となっています。この違いは決してランダムに無秩序に起こっているわけではありません。それぞれの動詞の原形の最後の音に注目してみると、(10a) の単語は [b][d][z] という有声音で終わっています。一方、(10b) の単語は [p][k][s] という無声音で終わっています。つまり、英語の規則過去形形態素がどのように発音されるかは、その単語の原形の最後の音の音韻的な特徴によって決まっているのです。<sup>16</sup>

---

ンパターンで読むということ、つまり複合語として発音する場合は「強・弱」の規則に従っているということ、を論じています。

15 複合語にさらに興味のある人は、基本的な文献として Aronoff (1976), Selkirk (1982) をご参照ください。

16 英語規則動詞の過去形には、第3のパターン (11c) として、skated や landed などのように [id] と発音されるものがありますが、ここでは議論を分かりやすくするために、この第3のパターンについての話は脇に置いておくことにします。

(11) 英語規則動詞の過去形形態素は

- a. 動詞原形の最後の音が有声音の時、有声音の [d] として現れる
- b. 動詞原形の最後の音が無声音の時、無声音の [t] として現れる
- (c. 動詞原形の最後の音が [d] または [t] の時、[id] として現れる)

つまり、英語母語話者の頭の中には、以下のような「有声性の同化現象 voicing assimilation」をつかさどる規則があるのです。下記、[+v] は直上の音が有声音であることを、[-v] は直上の音が無声音であることを表しています。

(12) 有声性の同化現象



語の最後の音 X が有声音であれば、過去形形態素の最初の音も有声音である [d] として、X が無声音であれば、過去形形態素の最初の音も無声音の [t] として、発音されるというしっかりとしたパターンが整っているわけです。

では、日本語の場合はどうでしょうか。日本語動詞の過去形形態素も、実は「た」と発音される場合と、「だ」と発音される場合があります。

(13) 日本語の過去形形態素

- |                           |                            |
|---------------------------|----------------------------|
| a.      食べた (tabeta)      | b.      死んだ (shinda)       |
| 見た (mita)                 | 読んだ (yonda)                |
| 書いた (kaita)               | 嗅いだ (kaida)                |
| 歩いた (aru <del>ita</del> ) | 騒いだ (saw <del>aida</del> ) |
| [ta]                      | [da]                       |

(13a) の「た」は最初の子音が無声音の [t] で、(13b) の「だ」は最初の子音が有声音の [d] です。ここにはどのようなパターンがあるのでしょうか。たとえば、「死んだ」と「食べた」の動詞の辞書形を比べてみると、それぞれ [shin] と [tabe] になります。すると、最初の一般化の可能性としては、辞書形が有声音子音（たとえば、[n]）で終わっている場合は、過去形が「だ」と有声音子音 [d] で始まる音になり、それ以外は無声音 [t] で始まる「た」となると考えることができそうです。「読んだ」の場合も、辞書形が [yom] であると考え、このパターンに当てはまります。最後の子音 [m] が有声音なので、過去形形態素も [da] となります。さらに「嗅いだ」や「騒いだ」も、一見すると「だ」の直前に有声音子音がないように見えますが、それぞれの辞書形が

[kag] と [sawag] であると考え、有声音子音 [g] で終わっている単語であると考えられます。したがって、「辞書形の最後の音が有声音である」という条件をそのまま保持することができます。

一方、「書いた」や「歩いた」の辞書形を見ると、それぞれ [kak] と [aruk] ですから、最後の音が [k] でありこれは有声音ではありません。したがって、過去形の発音に関して、次のような規則が日本語母語話者の頭の中にあると考えられます。

(14) 有声性同化規則 (voicing assimilation)

日本語の過去形形態素「た [ta]」は、辞書形が有声音で終わっている単語につく場合に限って、有声音 [d] で始まる「だ [da]」として具現される

上記 (13) の例は、以下のようにまとめることができます。[+v] は有声音、[-v] は無声音であることを示しています。

| (15) | 辞書形                  | → [ 有声性同化規則 ] →                                                                   | 発音される形                                      |
|------|----------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------|
| a.   | shin ta<br>[+v] [-v] | shin da<br>[+v] [+v]                                                              | shinda                                      |
| b.   | yom ta<br>[+v] [-v]  | yom da<br>[+v] [+v]                                                               | yonda<br>([m] → [n] という規則も適用) <sup>17</sup> |
| c.   | kag ta<br>[+v] [-v]  | kag da<br>[+v] [+v]                                                               | kaida<br>([g] → [i] という規則も適用)               |
|      |                      |  |                                             |
| d.   | tabe ta              | -----                                                                             | tabeta                                      |
| e.   | aruk ta<br>[-v] [-v] | -----                                                                             | aruita<br>([k] → [i] という規則も適用)              |

過去形形態素も辞書形は無声音 [t] で始まる「た」とであると仮定します。すると (15a) では動詞「死ぬ」の辞書形最後の音 [n] (有声音) と過去形形態素の最初の音 [t] とが隣り合うことになります。ここで、(14) の有声性同化規則が適用して、[ta] が [da] になり、最終的に [shinda] という形で発音されます。(15b) の [yom] + [ta] の場合も同様です。(15c) も同じように、辞書形の有声音 [g] に [t] が同化して有声音 [d] となり、まず、[kagda] となります。ここで、日本語は CVCV を基本とする開音節

17 ここで適用されている [m] から [n] への変化も同化現象の一種です。[t] が硬口蓋音 (舌先を上歯茎につけて発音する音) なので、その直前に現れている両唇鼻音 [m] が [t] の調音点と同化して、硬口蓋鼻音 [n] に変化しています。

言語であるので（「ん」に続く場合を除いて）、子音の連続を嫌うという性質があります。[kagda] では [-dg-] という子音連続があるので、それを解消するために [g] を [i] に変える規則が適用されて、最終的に [kaida] という形で具現されています。<sup>18</sup> 一方、(15d) の [tabeta] は、過去形形態素 [ta] の直前の音が有声子音ではなく、母音の [e] です。したがって、規則 (14) の適用条件を満たしていないので、規則は適用されず、なんの音韻変化も起こりません。そのままの形で発音されます。(15e) の [aruk] + [ta] の場合も、直前の音が有声子音ではないので、(14) の規則は適用されず、まず [arukta] となります。ここでも [-kt-] という子音の連続が嫌われ、[k] を [i] に変える規則が適用され、結果として [aruita] という形で具現されることになります。<sup>19</sup>

日本語の場合は、有声性同化現象の他にもいくつかの音韻変化プロセスが伴っているため、現象のパターンがやや見えづらくなっている部分もありますが、その基本には「た」の最初の無声子音 [t] が、直前の有声子音に同化して有声子音 [d] に変化しているという現象が存在します。しがたって、日本語の「た」が「だ」と発音されるパターンも、有声性同化現象に従っており、英語の過去形形態素が [d] と発音される場合に見られるものと同じ現象がここでも観察できるのです。

### 3.2 母音弱化と母音脱落

次に音韻現象の2つ目の例として、「母音弱化」と「母音脱落」という現象を考えてみることにします。英語では、強勢の置かれない母音が、「弱化母音 [ə]」（あいまい母音、あるいはシュワと呼ばれることもあります）として発音される現象があります。たとえば、Canada [kænədə] は最初の母音に主強勢があり、強く [æ] と発音されますが、Canadian [kənɛidiən] になると主強勢が2つ目の母音 [ei] に置かれ、最初の母音は弱化され [ə] となり、非常に弱く発音されます。同じように、camera の2つ目の母音、suppose の最初の母音、go to school の to の母音はみな、通常強勢が置かれることはなく、弱化母音 [ə] となっています。

(16) シュワ [ə] として具現される英語弱化母音の例

|             |          |          |               |
|-------------|----------|----------|---------------|
| Canadian    | camera   | suppose  | go to school  |
| [kənɛidiən] | [kæməɾə] | [səpouz] | [gou tə skul] |

さらに、このような弱化母音は、インフォーマルな日常会話などでは、しばしば脱落して発音されなくなります。これを母音脱落現象と呼びます。

18 この [g] が [i] へ変化する現象は「軟口蓋音弱化 velar softening」と呼ばれます。(15c) の例では、有声性同化規則 (14) の適用後に適用されるように順序付けられています。

19 ここでの [k] から [i] への変化も (15c) の場合と同じ軟口蓋音弱化規則によるものです。

(17) 弱化母音が完全に脱落する例

|             |          |          |              |
|-------------|----------|----------|--------------|
| Canadian    | camera   | suppose  | go to school |
| [k neidiən] | [kæm rə] | [s pouz] | [gou t skul] |
| ↓           | ↓        | ↓        | ↓            |
| ə           | ə        | ə        | ə            |

すなわち、音韻的に弱化された母音が、カジュアルな発話において完全に発音されなくなるという現象が起こっているわけです。<sup>20</sup>

それでは、日本語の場合はどうでしょうか。日本語には英語弱化母音のような「あいまい母音」[ə]は通常ありませんが、標準日本語・東京方言には興味深いある種の母音弱化現象が見られます。母音は通常有声音（声帯を振動させて出す音）ですが、「い」と「う」という高舌母音が、無声音子音にはさまれた環境に現れると無声化されます。たとえば、「北 [kita]」という単語は、標準日本語では [k] と [t] にはさまれた高舌母音 [i] が無声化されて（声帯を振動させずに）発音されます。同様に、「草 [kusa]」という単語は、無声音子音 [k] と [s] にはさまれた高舌母音 [u] が無声化されて発音されます。<sup>21, 22</sup>

(18) 辞書形

実際の発音

|                   |   |                                          |                    |
|-------------------|---|------------------------------------------|--------------------|
| 北 [kita]          | → | [k <sub>i̥</sub> ta]                     | ([i̥] は無声化された [i]) |
| 草 [kusa]          | → | [k <sub>u̥</sub> sa]                     | ([u̥] は無声化された [u]) |
| 菊池くん [kikuchikun] | → | [k <sub>i̥</sub> k <sub>u̥</sub> chikun] |                    |
| 洗濯機 [sentakuki]   | → | [sentak <sub>u̥</sub> ki]                |                    |
| 水族館 [suizokukan]  | → | [suizok <sub>u̥</sub> kan]               |                    |

さて、もし英語と日本語が音韻論的に同じ原理に従っているとすれば、日本語の弱化された母音も、カジュアルな発話において、脱落すると予測されます。実際に、そのような母音脱落が観察されます。「洗濯機・せんたくき」の「く」の母音 [u] は標準日本語では、無声化された弱化母音となっていますが、多くの人が日常会話では、この母音 [u] を完全に脱落させて、「せんたっき [sentakki]」と発音しています。同じことが、「水族館・すいぞくかん [suizokkan]」など多数の例で確認することができます。

20 たとえば、小説中の会話文などで、実際の発音に近い形で、s'pose と書かれることもあります。

21 高舌母音が無声化される現象は、モキル語 (Mokilese、南太平洋オーストロネシア語族の1つ) にも見られます (O'Grady, et al. 2005, p.102)。日本語だけに特有の現象ではありません。

22 この種の母音弱化は、たとえば、関西弁には通常起こらないと考えられています。

(19) 弱化された母音が完全に脱落する場合がある

辞書形                      丁寧な実際の発音      カジュアルな実際の発音

洗濯機 [sentakuki]    → [sentakuki]            → [sentakki]

水族館 [suizokukan] → [suizokukan]            → [suizokkan]

以上から、日本語母語話者と英語母語話者の頭の中にある言語音を操る仕組みには、次のような共通点があることが分かりました。

- (20)      a.            有声性同化現象をつかさどる仕組みを持っている  
            b.            音韻的に弱化された母音を削除する仕組みを持っている

この点でも日本語母語話者と英語母語話者は、頭の中に同じ仕組みを共有しているといえるでしょう。<sup>23</sup>

#### 4. 統語

##### 4.1 文を組み立てる仕組み：転位現象

人間が持っている文や句を組み立てる仕組みは、一般に「統語能力」あるいは「統語(論)」と呼ばれますが、以下のような興味深い特性を持っています。まずは、英語母語話者の頭の中を見てみましょう。

(21)      John ate miso ramen in the coop cafeteria.

(21) では、miso ramen が ate の直接目的語（食べられたもの）であり、in the coop cafeteria がその出来事が起こった場所であると解釈されます。これらの要素は、このようなタイプの文における最も自然な位置に現れていると考えることができます（最も自然な語順・無標の語順）。ところが、これらの要素は、次の (22) に見られるように、(21) の場合とは異なる位置で発音されることも可能です。

- (22)      a.            It is **miso ramen** that John ate \_ in the coop cafeteria.  
            b.            It is **in the coop cafeteria** that John ate miso ramen \_ .

(22a) で miso ramen は (21) と同様、ate の直接目的語として解釈されますが、下線で示された本来の直接目的語の位置とはだいぶ離れた位置に現れています。

23 人間言語の音韻現象にさらに興味のある人は、たとえば、以下の文献を参照してください。

Chomsky and Halle (1968), Kenstowicz (1994), 窪園 (2006), Ladefoged and Johnson (2014)



(22b) でも in the coop cafeteria は、(21) と同じように John が味噌ラーメンを食べた場所を明示する機能を果たしていますが、下線部で示された本来の位置とは別の位置で発音されています。つまり、(22) のこれらの句はある種の意味解釈を受ける基本的な位置と実際に発音される位置とが乖離しているわけです。このような現象を「転位 displacement」と呼びますが、英語母語話者が持つ言語能力の 1 つにこうした転位を可能にする仕組みがあるということになります。では、日本語母語話者の場合はどうでしょうか。次の例を考えてみましょう。

(23) 先生が職員室で学生を三人しかった

(23) で「三人」という単語は「学生」の数を指定していると解釈されます。「先生」の数を指定しているという解釈は大変難しいでしょう。つまりこの文は、「学生」の人数を明確に示し、「先生」の人数については何も述べていない文であると解釈されます。これは、この文では「三人」と「学生」との距離が、「三人」と「先生」との距離よりも近いから、と考えることができるかもしれません。ところが、次の (24) では大変興味深い現象が見られます。

(24) 学生を 先生が職員室で \_\_ 三人しかった

(24) では「三人」は「学生」よりも「先生」に近くなっています。それにもかかわらず、(24) は (23) の時と同じように、「三人」は「学生」を修飾しており、「先生」を修飾しているわけではないと解釈されます。つまり、(24) の「学生(を)」は、(23) の時と同じように、あたかも「三人」の隣の下線部位置にあるかのような解釈を受けているわけです。句が文中で実際に発音されている位置とは異なる位置である種の意味解釈を受けているという点で、日本語の (24) も統語的な転位現象を含んでいると考えることができます。日本語でも英語でもこのような転位現象はたくさん確認することができます。したがって、日本語母語話者の頭の中の文法も英語母語話者の頭の中の文法もこのような転位現象を可能にする仕組みを持っているという点で、共通であるということができます。

## 4.2 文を組み立てる仕組み：情報提示の方法

日本語の母語話者であれば、小学校に上がる年になれば（あるいはもっと前から）助詞の「～は」と「～が」の使い分けをきちんと理解しているようです。ところが、日本語を学習中の留学生に、「バスが来た」と「バスは来た」の違いは何かと聞かれると、正確に説明するのはとても難しいと思います。母語の言語知識を無意識のうちに自動的に使っているということと、それを意識的に理解し、客観的に説明することとは、ずいぶん違うことであると考えられます。同様に、日本人英語学習者にとって、定冠

詞 the の使い方（いつ使い、いつ使わないのか、いつ a を使うのかなど）は、正確に理解するのはとても大変なことです。英語の母語話者はみな無意識のうちにきちんと使っているようです。日本語助詞の「～は」や「～が」も、英語の冠詞 the（あるいはそれを使わないこと）も、文を組み立てていく上でとても重要な働きをしている文法語彙ですが、この節では両者に共通の意味機能があることを紹介したいと思います。

まずは英語の例 (25) を見てみましょう。(25a) では、student には the は付いていません。Student は数えられる名詞でここでは単数形なので、不定冠詞の a が付いています。そして、通常のイントネーションで発話された場合、(25a) は文全体が「新情報」を表していると解釈されます。つまり、「学生が 1 人 CALL 教室にいた」という事実を、新情報として文全体で表しているわけです。一方、(25b) では student に the が付いています。ここでは、主語の the student が既知の情報（旧情報：話者と聞き手とでどの学生のことを指しているのかが分かっている）であり、それに対して述語の部分で新しい情報を加えるという情報構造になっています。

(25) a. There was a student in the CALL room / A student was in the CALL room.

文全体が新情報

文全体が新情報

b. The student was working on her assignment.

既知情報

新情報

(25a) のような意味情報を担う文を「単純判断」の文と呼び、(25b) のような意味情報を担う文を「総合判断」の文と呼びます。

(26) a. 単純判断 (thetic judgment): 文全体がその状況・出来事を新情報として記述する

b. 総合判断 (categorical judgment): 特定の主題（通常は主語）があり、述語部分はその主題について叙述する

英語では、その文が単純判断か総合判断かを区別する際に、主語名詞句に定冠詞 the があるかないかが大きな役割を果たしているわけです。では日本語ではどうでしょうか。

(26) a. 学生が一人 CALL 教室にいました

(単純判断)

文全体が新情報

b. 学生は 宿題をやっていました

(総合判断)

既知情報

新情報

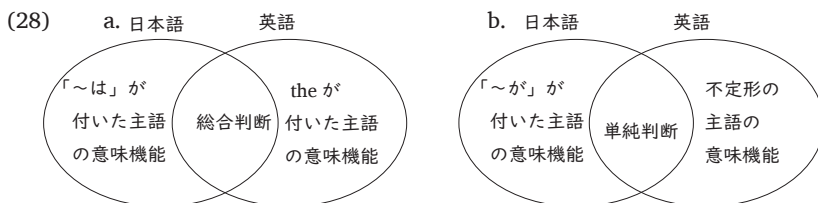
(26a) では文全体を新情報として提示しているのに対して、(26b) では話者と聞き手の間で既知であるトピック「学生」に関して、述語部分で叙述している文になっています。(26a) と (26b) の主語の重要な違いは、前者が「～が」でマークされているのに対して、後者が「～は」でマークされているということです。つまり、日本語では、「～が」でマークされた主語は単純判断の文と相性が良く、「～は」でマークされた主語は総合判断の文と相性が良い、ということになります。

さらに、英語の there 構文はある命題を単純判断として表すことに特化された構文であると考えることができそうです。したがって、there 構文の主語は通常不定形の名詞句が要求され、the がついているような定名詞句主語とは大変相性が悪いことが知られています。<sup>24</sup>

- (27)      a.            There was a student in the room.  
              b.            ??There was the student in the room.

(27b) が大変不自然な文になるのは、全体として単純判断を表そうとする there 構文の性質と、総合判断を表す文に用いられる定冠詞 the が付いた主語名詞句の性質とが、矛盾を起こしているからだと考えられます。

もちろんここで、日本語の助詞「～は」と英語の定冠詞 the の意味機能が完全に同じだといっているわけではありません。「～は」には上記で述べた以外にもさまざまな意味機能がありますし、定冠詞の the にも上記以外のさまざまな意味機能があります。ここでの主張は、両者には主語名詞句を総合判断の文と相性がよい形にするという、意味機能上の重要な共通点があるということです。同様に、日本語の助詞「～が」が付いた主語と英語の不定形の主語とには、単純判断の文と相性がよいという共通の意味機能があるということです。図にまとめると以下ようになります。



以上、日本語母語話者と英語母語話者の持つ統語能力の一部を見てきました。両者とも、文中の要素が発音される位置とある種の解釈を受ける位置とが乖離している「転

24 これは there 構文が持つ「定性効果 definiteness effect」と呼ばれています (Milsark 1977)。

位」という現象を許すという点で共通の仕組みを持っているといえます。また、両者とも文という形式を用いてある命題を表現する際に、「単純判断」として命題を表現する文法上の仕組みと、「総合判断」として命題を表現する仕組みを持っている、という点で同じであるといえるのです。<sup>25</sup>

## 5. 言語的意味と語用論

### 5.1 目にみえない要素の解釈

人間言語には、余剰性や不必要な繰り返しを避けるために、なんらかの省略現象がみられます。そして、省略されているものをどのように意味解釈するのかということに関しては大変洗練された仕組みを持っています。まずは、以下の英語の動詞句削除 (VP-ellipsis) の例を見てみましょう。

- (29) Bill will wash his bike, and John will [ e ], too.<sup>26</sup> ( “his = Bill” とする )  
a. [ e ] = wash Bill’s bike ( 厳密同一解釈 )  
b. [ e ] = wash John’s bike ( ゆるい同一解釈 )

(29) の文で、John が何をするのかということに関して、形の上では、[ e ] の部分は wash his bike が復元されますが、この his の解釈に関して、2通りの可能性があります。1つは his = Bill’s という「厳密同一解釈」(29a)で、John も Bill の自転車を洗う(のを手伝う)という意味になります。つまりこの解釈のもとでは、自転車はビルの自転車 1台だけが出てくる状況を表すことになります。ところが(29)の文にはもう1つ his = John’s という「ゆるい同一解釈」(29b)も可能です。John が洗うのは John 自身の自転車ということになり、この解釈では自転車は Bill が洗う Bill の自転車と John が洗う John の自転車の2台の自転車が出てくる状況を表すことになります。<sup>27</sup>

では、日本語の場合はどうでしょうか。日本語では、文脈から明らかな場合、主語や目的語が発音されない(省略される)という現象が古くから知られています。<sup>28</sup> 興

25 英語と日本語の転位現象に関してさらに詳しく知りたい人は、Chomsky (1977), Miyagawa (2005) を参照してください。また、「単純判断」「総合判断」に関しては、Kuroda (1972, 1980) を、日本語の「～は」と「～が」の様々な機能に関しては、野田 (1996) を参照してください。

26 ここで [ e ] は、発音されないが意味解釈を与えられる要素がそこにあることを示しています。

27 このように英語の動詞句削除が2種類の解釈を持ちうる可能性は、1970年代から明らかになっており (Sag 1976 や Williams 1977 など)、頭の中の意味表示がそれぞれどのようになっているのかということに関する分析は、それ以降今日までさまざまな提案がなされてきています。

28 Kuroda (1965) など。

味深いことに、このような発音されない主語や目的語にも、英語の動詞句削除と同じ解釈上の特性が見られます。<sup>29</sup> 次の例を考えてみましょう。

(30) ケンが 自分の自転車を 洗っていたので ジョンも [e] 洗った

- a. [e] = ケンの自転車 (厳密同一解釈)
- b. [e] = ジョンの自転車 (ゆるい同一解釈)

(30) の文では、ジョンが洗ったのが「ケンの自転車」であるという厳密同一解釈 (30a) と、「ジョン自身の自転車」であるというゆるい同一解釈 (30b) の両方の解釈が潜在的に可能です。つまり、日本語母語話者も英語母語話者も、文の省略された部分に解釈を与える際に、「厳密同一解釈」を与える仕組みと「ゆるい同一解釈」を与える仕組みの両方を頭の中の言語能力として共有していると考えることが出来るわけです。では、意味解釈能力の具体例の最後として、主語や目的語に量化詞がついている文の解釈について考えてみましょう。

## 5.2 量化詞の相互作用

今、教室にいる学生の総数を 5 人と仮定して、次の文を見てください。

- (31) a. Every student read two books last week.  
b. どの学生も先週本を 2 冊読んだ

この文が成り立つ状況として、学生が読んだ本の数は最大で何冊となるでしょうか。また、最小は何冊となるでしょうか。学生数は今 5 人であると仮定していますから、英語の (31a) でも日本語の (31b) でも、本の数は最大で (32) に示すように 10 冊となり、最小の場合は (33) で示すように 2 冊となります。

(32) 5 人の学生が読んだ本が全て別々の本である場合。本は全部で  $5 \times 2 = 10$  冊

(33) 5 人の学生全員が同じ 2 冊の本を読んだ場合。本は全部で 2 冊

英語の every, some, most あるいは one, two などの数詞、不定冠詞の a は量化詞と呼ばれます。日本語の「どの～も」や「ほとんどの～」あるいは「1 人、1 つ、2 人、2 つ」なども量化詞の一種です。そして、1 つの文の中に 2 つ（以上）の量化詞が含まれている場合、量化詞同士の作用域の相互関係によって、2 つ（以上）の解釈が可

---

29 日本語でこの現象を最初に分析したのは、Otani and Whitman (1991) です。また、この現象をゼロ代名詞でもなく、動詞句削除でもなく、項削除であるとする分析を Oku (1998) が提案しています。

能になるという、大変興味深い現象が起こることが古くから知られています。<sup>30</sup> たとえば、上記 (31) の文で、もし量化詞 two が量化詞 every を自分の作用域に含めると、その関係は (34) のように示すことができます。

(34) 存在読み

$\exists y, y = \text{two books}, \forall x, x = \text{a student such that } x \text{ read } y. \text{ (two} > \text{every)}$   
'There are two books such that all the students read the two books'

これは「2冊の本が存在し、その2冊をすべての学生が読んだ」という意味解釈を表しています。つまり、この解釈を採用した場合、本が全部で2冊という状況を記述していることになります。

一方、(31) の文で量化詞 every が量化詞 two を自分の作用域に含めると、その関係は (35) のような意味表示となります。

(35) 分配読み

$\forall x, x = \text{a student}, \exists y, y = \text{two books such that } x \text{ read } y. \text{ (every} > \text{two)}$   
'For all x, x a student, there are two books such that they read them'

これは「どの学生をとっても、その学生が読んだ本が2冊ある」という意味解釈を表しています。つまり、この解釈を採用した場合、5人の学生が読んだ本が全て別々である状況（結果として、本の総数は10冊になる状況）を記述することができるわけです。<sup>31</sup> したがって、日本語母語話者も英語母語話者も量化詞の相互作用から異なる意味解釈を表示し理解する仕組みを頭の中に持っていることになるわけです。

### 5.3 量化詞の相互作用と世界に関する知識：意味論と語用論の接点<sup>32</sup>

さて、上記 (31) の例文のように、every や「どの～も」のような普遍量化詞 (universal quantifier) が、some/a のような存在量化詞 (existential quantifier) や two/2冊のような数詞よりも文中で先に現れてくる場合は、(34) のような「逆作用域 (inverse scope)」の解釈も、(35) のような「順行作用域 (surface order scope)」の解釈も、文脈さえ整えばどちらも比較的容易に得ることができると考えられています。ところが、次の (36) に見られるように、存在量化詞や数詞が文中で普遍量化詞

30 May (1985) を参照。

31 5人がそれぞれ2冊の本を読んだ、という状況であっても、そのうちの何冊かはたまたま同じ本であったという可能性はあります。(35) はそのような状況の可能性も含めた意味表示です。

32 この節の議論は、英語に関しては Reinhart (2006) に、日本語に関しては奥 (2010) と Oku (2012) に、もとづいています。

よりも先に現れている文では、順行作用域の解釈 (37a) は簡単に得られるのに対して、(37b) のような逆作用域の解釈は大変難しいことが知られています。<sup>33</sup>

- (36) a. A TA locked every CALL room.  
b. TA が 1 人、どの CALL 教室にもカギをかけた
- (37) a.  $\exists x, x = \text{TA}, \forall y, y = \text{CALL room such that } x \text{ locked } y.$  (順行作用域解釈)  
(特定の TA が 1 人で、全ての CALL 教室のカギをかけた)
- b.  $??\forall y, y = \text{CALL room}, \exists x, x = \text{TA such that } x \text{ locked } y.$  (?? 逆作用域解釈)  
(どの CALL 教室に関しても、そこにカギをかけた TA が 1 人いる)

統語構造にもとづいて、頭の中で意味構造を導き出すわけですが、この関係ができるだけ直接的で簡潔であるべきであるという考え方があります (「透明性の仮説 transparency thesis」)。(36) の文構造から、順行作用域 (37a) の意味表示への派生は、2 つの量化詞の相対的な位置関係に変更を加えることがないので、透明性の仮説に合致した派生であるということが出来ます。それに対して、(37b) の意味表示では、2 つの量化詞の相対的な位置関係が、もとの文 (36) の統語構造とは逆になっています。つまり、(36) の文から (37b) の意味表示を派生するには、実際に発音される語順とは異なる構造を頭の中でつくらなければならないわけですから、ひと手間余分なコスト (量化詞の相対的な位置を入れ替えるという操作) がかかっているということになります。(36) の文を見た時に、(37a) の意味解釈の方が (37b) の意味解釈よりもはるかに得やすいのは、(37b) の意味表示を得るには派生の過程で (37a) には必要がない余分なコストがかかっているからと説明することが出来ます。日本語母語話者も英語母語話者も、1 つの文の中に存在量化詞・普遍量化詞という順序で量化詞が出てくる場合、統語構造と意味表示との関係に関して、順行作用域解釈がより得やすく、逆作用域解釈が得づらいという、同じ仕組みを共有していると考えられることができます。

- (38) 日本語も英語も、統語上の語順が「存在量化詞 > 普遍量化詞」である場合、順行作用域解釈が強く好まれる

最後に、我々が持っている「世界に対する認識」と意味構造の関係について、大変興味深い事例をひとつ考えてみます。上記 (36) の例では、(38) のような一般化が可能であることをいま見ましたが、同じように「存在量化詞 > 普遍量化詞」という語順になっている (39) の例を考えてみましょう。

---

33 Reinhart (1976, p. 193) は、このような場合の逆作用域解釈は基本的に不可能であると論じています。ただし、以下で見るように、Reinhart はこの見解を後に撤回しています。



- (39) a. A TA is watching and waiting in every CALL room.  
 b. TA が 1 人、どの CALL 教室にも待機しています

非常に面白いことに、(39) は日本語の場合も英語の場合も、語順通りの順行作用域解釈 (40a) は大変難しいのに対して、逆作用域解釈 (40b) は大変自然になっています。

- (40) a.  $?? \exists x, x = \text{TA}, \forall y, y = \text{CALL room such that } x \text{ is watching and waiting in } y.$   
 (?? 順行作用域解釈)  
 (特定の TA が 1 人いて、その TA が全ての CALL room に待機している)  
 b.  $\forall y, y = \text{CALL room}, \exists x, x = \text{TA such that } x \text{ is watching and waiting in } y.$   
 (逆作用域解釈)  
 (どの CALL room にも, TA がそれぞれ 1 人待機している)

いったいなぜ、(39) の文に対しては、意味表示を派生する際に余分なコストがかかっていないはずの順行作用域解釈 (40a) が難しく、頭の中で語順を入れ替えるというコストをかけた (40b) の解釈の方が得やすくなっているのでしょうか。この事実に対する Reinhart (2006) の提案は以下の通りです。(39) の文に対して、余分なコストをかけずに意味表示が得られる順行作用域解釈は、その命題内容がわれわれが持つ世界に対する知識に照らして、非現実的で常識的には考えづらい状況を表していることになります。すなわち、常識的に 1 人の特定の TA が複数の教室に同時に待機するという状況は考えにくいということです。もし、この文に唯一このような解釈の可能性しかないのであれば、そのように解釈されます。つまりこの文は現実的にはありえない状況を述べている文とみなされるわけです。ところが、(36) の文には、意味表示を派生する際にひと手間コストをかけて、2 つの量化詞の相対的位置を入れ替えてやれば、頭の中では (37b) の意味表示を得ることができます。そして、この意味表示は、われわれの世界に対する知識に照らして、現実的にありうる自然な状況を述べています。それぞれの教室に、(別々の) TA が 1 人ずつ待機している、という状況です。そこで、われわれ人間は、(38) で述べたように、通常は 1 つの文に対して、余分なコストをかけずに得られる意味表示で (発語する時と同じ語順の意味構造で) 解釈をすることを好みますが、(i) そのような解釈が現実世界の状況としては不自然であり、かつ (ii) コストをかけて得られる方の意味表示が現実世界の状況としては自然である場合に限り、余分なコストをかけたほうの意味表示を採用する、という認知的なメカニズムが働いていると考えることができる、と Reinhart (2006) は論じています。Reinhart は英語母語話者の持つ仕組みに関する議論ですが、日本語母語話者も全く同じ仕組みを持っているということを奥 (2010) や Oku (2012) は論じています。



以上、言語表現をどのように解釈するのかという仕組みについて、意味論と語用論の両方の面を見てきました。

- (41) 日本語母語話者も英語母語話者も、実際には発音されない文中の要素に対して「厳密同一解釈」を与える仕組みと、「ゆるい同一解釈」を与える仕組みを持っている
- (42) 日本語母語話者も英語母語話者も、文中に2つ（以上）の量化詞がある場合、量化詞の相互作用によって、異なる解釈を与える仕組みを持っている。
- 語順が「普遍量化詞 > 存在量化詞 / 数詞」の場合、順行作用域解釈も逆作用域解釈も得やすい
  - 語順が「存在量化詞 > 普遍量化詞」の場合、順行作用域解釈の方が逆作用域解釈よりも得やすい。（ただし、後者の解釈の方が前者よりも、世界の常識に照らして自然である場合、後者が好まれる場合もある）

人間言語以外にも世界には情報伝達のシステムはたくさん存在します。人工的なものではコンピュータのプログラムを走らせる「言語」がありますし、自然界にはさまざまな動物が、個体間のあるいは集団間の情報伝達の仕組みを持っています。しかし、たとえば上記(41)や(42)のような特性を持った情報伝達システムは、人間の脳内の言語システム以外には存在しないのではないかと考えられます。<sup>34</sup>

## 6. おわりに — 生物言語学の視点

「言語」の研究は古くから行われてきています。そして、20世紀の半ばまでは、その社会的な側面や文化的な側面が、言語研究の興味の中心であることが多かったように思います（現在でも、一般の人のイメージはそうかもしれません）。このような場合、研究対象となっている「言語」は本稿でいう「E言語」、つまり表に出てきた観察可能な言語現象（の総体）のことである場合がほとんどではないかと思っています。しかし、20世紀の半ばから始まった新しい言語学は、研究の対象に「I言語」という新しい側面をくわえました。つまり、表面的に観察可能な言語現象を可能にしている、人間の頭の中の仕組みを明らかにしようとする研究が行われるようになったわけです。そして、I言語の視点から見ると、日本語母語話者も英語母語話者もその頭の中の仕組みは、その多くの側面において、同一の原理や規則によって律されていることが分かってきたのです。本稿で紹介した具体例でいえば、複合語を新たに生み出したり理解する仕組み、言語音を操る仕組み、文を組み立てる仕組み、意味を理解する仕組みなど、多くの点で共通の原理や規則がその背後にあることを見てきました。このことは、言語

---

34 削除現象にさらに興味のある人は、Oku (1998, 2008), Saito (2007), Takahashi (2008)などを参照してください。

の多様性に関する伝統的な観点からすると驚くべきことかもしれません。しかし一方で、人間が地域や文化あるいは人種などに関わらず、生物としての遺伝的特質はほぼ同じであることを考えると、個々の人間の脳内認知機能の一部として存在している言語能力が、地域や文化を超えて本質的な部分で同質であるということは、しごく当然のこととみなすこともできるでしょう。本稿では、日本語母語話者と英語母語話者の言語システムの比較という形で議論を進めてきましたが、過去 60 年近くの「I 言語」研究の積み重ねから、多数の人間言語にはその背後に人類共通の仕組みがあることが分かってきています。

最後に、人間の言語、つまり頭の中の言葉を操る仕組みは、根本的なレベルでは同じであるという結論には、どのような意味があるかを少し考えてみたいと思います。まず第一に、人間の脳内にある言葉を操る仕組みの本質的な部分は同質であるとする、今度は逆に、表面的な違いや多様性がなぜ生まれてくるのか、そしてなぜそのような違いや多様性が維持され続けるのかということが問うべき課題として浮き上がってきます。<sup>35</sup> 生物学的に共通な部分を深く明らかにすることによってはじめて、違いや多様性の本質にかかわる部分が見えてくるのではないかと思います。

次に、外国語学習あるいは外国語教育の観点から考えて見ましょう。「はじめに」でも少し触れたように、目標学習言語と母語との違いを理解し克服していくことが、外国語学習の非常に重要な部分であると思われます。そしてここでも、「違い」の本質をきちんと理解するための大前提として、どこがどのように「同じ」であるのかということの正確な理解が欠かせないと思われます。表面的な些細な違いを必要以上に難しいものであると感じるのは得策ではないでしょう。また、重要な違いを見逃したり過小評価するのもよい学習者になるための妨げになってしまうかもしれません。

さて、このようなタイプの言語学について学生に講義をすると、ときどき「結局、それが分かってなんの役に立つのですか？」という質問を受けることがあります。日常的な意味での「実用性」には乏しい基礎研究はたくさんあります。そして、物事の本質をより深く、より正しく理解してゆくことは、人間にとってとても重要なことであると考えます。無知は、いらぬ偏見や差別を生むもとにもなりえます。

人間の言語能力の本質的な部分は、全ての人類に生物学的に共通であるということ、そして人間言語と同じようなシステムはこの地球上に（もしかすると全宇宙でも）他にはないということが分かってくると、人類という種は非常にかけがえのない存在であるように思えてきます。自分自身もそのような貴重な存在の 1 人であり、隣の人、地球の裏側の人もみな 1 人ひとりかけがえのない存在であるという認識を与えてくれる 1 つの方法であるとすれば、このようなタイプの言語学も世の中に対して十分

---

35 福井 (2012) を参照。

に「役に立つ」重要な意義があるのではないかと考えます。

## 参考文献

- Aronoff, Mark. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. MIT Press.
- Baker, Mark. 2001. *The Atoms of Language: The Mind's Hidden Rules of Grammar*. Basic Books.
- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1977. On WH-Movement. In Culicover, P., T. Wasow, and A. Admajian (eds.) *Formal Syntax*. Academic Press, 71–132.
- Chomsky, Noam. 1986. *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. Praeger.
- Chomsky, Noam. 2007. Biolinguistic Explorations: Design, Development, Evolution. *International Journal of Philosophical Studies* 15(1), 1–21.
- Chomsky, Noam and Morris Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*. Harper and Row.
- 福井直樹. 2012. 『新・自然科学としての言語学 生成文法とは何か』(ちくま学芸文庫)
- Kenstowicz, Michael. 1994. *Phonology in Generative Grammar*. Blackwell.
- 窪園晴夫. 2002. 『新語はこうして作られる』(岩波書店)
- 窪園晴夫. 2006. 『アクセントの法則』(岩波書店)
- 窪園晴夫・太田聡. 1998. 『音韻構造とアクセント』(研究社)
- Kuroda, S.-Y. 1965. *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Ph.D. Dissertation, MIT.
- Kuroda, S.-Y. 1972. The Categorical and the Thetic judgments: Evidence from Japanese Syntax. *Foundations of Language* 9, 153–185.
- Kuroda, S.-Y. 1980. Bun Kouzou no Hikaku [The Comparison of Sentence Structures]. In Kunihiro, Tetsuya (ed.), *Niti-Eigo Hikaku Kouza 2: Bunpou* [Lectures on Japanese-English Comparative Studies 2: Grammar], 23–61. Tokyo: Taisyukan.
- Ladefoged, Peter and Keith Johnson. 2014. *A Course in Phonetics*, 7th ed. Cengage Learning.
- May, Robert. 1985. *Logical Form*. MIT Press.
- Milsark, Gary. 1977. Toward an Explanation of Certain Peculiarities of the Existential Construction in English. *Linguistic Analysis* 3, 1–29.
- Miyagawa, Shigeru. 2005. Locality in Syntax and Floated Numeral Quantifiers in Japanese and Korean. *Japanese/Korean Linguistics* 14, 270–282.
- 野田尚史. 1996. 『「は」と「が」』(くろしお出版)

- O'Grady, William, John Archibald, Mark Aronoff, and Janie Rees-Miller. 2005. *Contemporary Linguistics, An Introduction* (5th edition). Bedford/St. Martin's.
- Oku, Satoshi. 1998. LF Copy Analysis of Japanese Null Arguments, *CLS* 34, 299–314.
- Oku, Satoshi. 2008. Minimalism and Information Structure: A Case of Ellipsis in Japanese, *Workshop on Altaic Formal Linguistics* 5, 257–269.
- 奥 聡 . 2010. 統語、情報構造、一般認知能力、長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究 命題を超えて』 開拓社, 227–267.
- Oku, Satoshi. 2012. Interpretive Economy: A Note on Markedness and Computation, *Formal Approach to Japanese Linguistics* 5, 207–216.
- Utani, Kazuyo and John Whitman. 1991. V-raising and VP-ellipsis. *Linguistic Inquiry* 22, 345–358.
- 大津由紀雄 . 2004. 『探検！ことばの世界』 (ひつじ書房)
- Pinker, Steven. 1995. *The Language Instinct*. HarperPerennial.
- Reinhart, Tanya. 1976. *The Syntactic Domain of Anaphora*, Ph.D. Dissertation, MIT.
- Reinhart, Tanya. 2006. *Interface Strategies: Optimal and Costly Computations*. MIT Press.
- Sag, Ivan. 1976. *Deletion and Logical Form*. Ph.D. Dissertation MIT.
- Saito, Mamoru. 2007. Notes on East Asian Argument Ellipsis. *Language Research* 43, 203–227.
- Selkirk, Elizabeth. 1982. *The Syntax of Words*. MIT Press.
- 白勢彩子・桐谷滋 . 2001. 複合名詞アクセント規則の獲得過程 . *Journal of the Phonetic Society of Japan* 5(2), 39–53.
- Takahashi, Daiko. 2008. Noun Phrase Ellipsis. In Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 384–422. Oxford University Press.
- 上田雅信 . 2004. 生成文法の言語観と研究方法 . 中井悟・上田雅信 (編) 『生成文法を学ぶ人のために』 (世界思想社), 3–38,
- Williams, Edwin. 1977. Discourse and Logical Form. *Linguistic Inquiry* 8, 101–139.



# 拡張現実の時代における自由と偶有性

—インターネットが私たちから奪うもの—

山 田 義 裕

## 1. はじめに

インターネットは、1980年代に大学等研究機関の研究者たちが学術目的で活用を始め、1990年代になって商用サービスが始まったのを契機に社会全体に急速な勢いで普及していく。その後わずか30年ほどの間に、情報通信ネットワークのインフラストラクチャーが整備され、また情報通信機器のモバイル化と高機能化が進み、今やスマートフォン等による移動体通信によりいつでも、どこでも、手軽に大容量データの高速通信が可能となっている。

モバイル機器によるインターネット利用が大衆化する中で、インターネットという電子メディア空間は、もはや私たちが生活する現実空間とは独立して存在するもうひとつの世界ではなくなった。この空間における通信や交流といったネット上の活動は、今や私たちの現実空間における日々の暮らしの欠かさない重要な一部となっている。このような電子メディア空間と現実空間の融合は、私たちの世界の認識、リアリティのありかたに少なからず影響を及ぼすはずである。小稿では、この問題を自由と偶有性という観点から考えてみたい。

## 2. メディアの社会的影響—ジョシュア・メイロウィッツが明らかにしたこと

ジョシュア・メイロウィッツ（Joshua Meyrowitz）は、電子メディアが私たちの社会行動にどのような影響を及ぼすかについて、主に本（印刷メディア）とテレビ（電子メディア）の比較を通じて論じている（Meyrowitz 1985=2003）。メイロウィッツは、この研究に取り組んだきっかけとして、彼が大学院でメディアと対人関係の相互作用についての研究を始めようとした際にこの二つの研究領域が交わることなく全く独立に研究が行なわれているのを知って驚き、この二つを結びつけるべく研究に着手した、と述懐している（Meyrowitz 1985=2003: 11）。そして、二つの研究領域が融合しなかった要因として、「対面行為とメディア・コミュニケーションとは全く異なるコミュニケーションであるという伝統的なものの見方、つまり現実生活対メディアというものの見方から来ている」（Meyrowitz 1985=2003: 28）と推測している。

メイロウィッツの研究は、この二つの研究領域の代表的理論、すなわちアーヴィン・

ゴフマン (Erving Goffman) の相互行為論とマーシャル・マクルーハン (Herbert Marshall McLuhan) のメディア論を統合することで、テレビが優勢となってきた当時のメディア状況において、私たちの社会的行動がどのように変容したかについて分析を試みたものである。

メイロウィッツの研究の中で、小稿の議論にとって特に重要なのは、新たなメディアの誕生に伴って生じる「社会的状況 (social situations)」の再構成に関する次の新たな提案である。彼は、社会的状況は「部屋や建物のような物理的セッティングと、メディアによってつくられた『情報セッティング』」(Meyrowitz 1985=2003: 34)の双方を含むと仮定する。ゴフマンの時代のメディア状況においては、社会的状況は物理的セッティング、すなわち「場所」により条件付けられており、「特定の時間と場所に置いて対面的に起こるエンカウンターのみ」(Meyrowitz 1985=2003: 83)が社会的状況と見做されていた。それに対してメイロウィッツは、「相互行為の性質を決めるのは物理的セッティングそれ自体ではなく、情報フローのパターン」だと述べ、新たな電子メディアが普及する中で「メディア介在のエンカウンター」をも含めて扱うには、社会的状況を「情報システム」すなわち「社会的情報に対するある所与のアクセスパターン」(Meyrowitz 1985=2003: 84)と捉え直すべきであると主張する。そして、印刷メディアの時代、強固に結びついていた物理的場所と社会的「場所」の関係を電子メディアが「ほとんど完全に分離し」(Meyrowitz 1985=2003: 231)、誰もがメディアを介して舞台裏領域にアクセスできるようになると、異なる「集団」、異なる「社会化段階」そして異なる「権威レベル」に属する人たちの社会的役割が影響を受け、その結果私たちの社会行動の様式が変化すると主張している。

その上で、メイロウィッツは印刷メディアと電子メディアが伝達する情報タイプの差異に注目し、印刷メディアから電子メディアへの移行は「フォーマルな舞台上もしくは表領域の情報から、インフォーマルな舞台裏もしくは裏領域の情報の変移であり、抽象的な非個人的メッセージから具体的な個人的メッセージへの変移である」と主張する。そして彼は、この二つのメディアの情報タイプについて次の三つの観点、すなわち「コミュニケーション対表出 (communication vs. expression)」、「言説的対現示的 (discursive vs. presentational)」、「デジタル対アナログ (digital vs. analogic)」から説明を試みている (Meyrowitz 1985=2003: 187)。

「コミュニケーション」と「表出」を例に彼の議論をみてみよう。この二分法は、ゴフマンが対面的エンカウターの特性を説明する際に活用したものであるが、メイロウィッツはこの区別を印刷メディアと電子メディアによって伝達される情報のタイプの違いに応用している。ゴフマンによると、「コミュニケーション」とは『『メッセージ』の意図的な伝達を目的とした、言語もしくは言語に似たシンボルの使用を意味するもの』(Meyrowitz 1985=2003: 188)と狭義に定義する一方で、「表出」とは「人が環境に居るだけで生まれる身振りや信号や発生や微表や動作」(Meyrowitz 1985=2003: 187)を指す。ゴフマンのコミュニケーションは意図明示的なもので

あり、自ら始めたり中断したりすることも可能であるが、一方表出は無意識な所作であるためコントロールすることができない。メイロウィッツは、この二つの差異を印刷メディアと電子メディアに応用し、前者は意図明示的コミュニケーションのみしか含まないのに対して、後者では個人的な表出が漏れ出てしまうこともある、と次のように主張する。

電子メディアは、かつて私的な相互行為に限定されていた情報を全ての局面で公的にする。電子メディアは、かつて互いに直接かつ近接の観察をしている人々のあいだでだけ交換されていた情報を暴露するのである。(Meyrowitz 1995=2003: 189)

メイロウィッツの研究は、新たなメディアの普及により社会的役割のあり方が影響を受け、その結果私たちの社会的行動が変化することについて、主に電子メディアの代表であるテレビを事例に実証的に論じた。テレビは現代のメディア環境においても未だ重要な位置を占めてはいるものの、1990年代半ばから普及したインターネットは私たちのメディア環境およびメディアと現実の関係に対して、これまでとは質的に大きく異なる影響を及ぼし始めている。テレビは新聞やラジオの延長線上にあるマスメディアの代表選手であり、近現代のメディア環境を最もよく特徴付けるメディアである。一方、インターネットは、特にコミュニケーション様式という観点から見ると、近代的マス・コミュニケーションとは明らかに異なるコミュニケーション環境を生じさせている。特にソーシャルメディアの普及後は、テレビに代表される「一対多」で一方向のマス・コミュニケーションとは対照的な「多対多」の双方向コミュニケーションがインターネット上では主流となっている。

次節以降の議論においては、基本的にメイロウィッツと同じ問題意識のもと、インターネットというメディアが私たちの社会的行動にどのような影響を及ぼすのかについて、「自由」と「偶有性」という二つのコンセプトに着目して考察する。

### 3. インターネットの進化—巨大データベースからソーシャルメディアのプラットフォーム、そして拡張現実へ

インターネットが普及し始めたのは、米国や日本などの先進国においても1990年代半ばからである。まだ四半世紀足らずの短い歴史しかないのだが、このわずかな期間にインターネットはいくつかの段階を経ながら急速に進化を遂げた。本節では、インターネットの変遷について、三つの大きな変化の節目に着目してごく簡単に概観する。<sup>1</sup>

---

1 インターネットの黎明期の状況をまとめる上で、インターネットについての初期の啓蒙書の代表である村井（1995）を参考にした。



インターネット誕生のきっかけは、よく知られているように 1969 年に発足した米軍の ARPANET (Advanced Research Projects Agency Network) であるが、その後 1983 年に非軍用化されて大学関係者等が学術研究目的で活用し始め<sup>2</sup>、米国では Bitnet や CSNET、日本でも JUNET 等のローカルネットワークが立ち上がり、それぞれのネットワークが互いに接続されることで現在の地球全体を覆う “the Internet” へと発展していった。(村井 1995)。

学術研究目的の活用とは言っても、一部のコンピュータ・サイエンティストたちの専門研究は別にして、当初はせいぜい研究者間の電子メールでのテキストデータのやり取り程度に過ぎなかった。しかし、1989 年にバーナーズ・リー (Tim Berners-Lee) がハイパーテキストを活用した WWW (World Wide Web) システムを考案し、また同時にこのシステム用の新たな通信プロトコル (HTTP) を設計することで、現在のウェブ通信環境の基礎ができていく。1990 年代初めに、Mosaic や Netscape 等のウェブ・ブラウザと呼ばれるプログラムが次々と開発、一般に提供されたおかげで、これらのブラウザを活用して手軽に通信が行えるようになり、さらにインターネット・サービス・プロバイダー等の事業者が増えて商用化が進むことでインターネットは瞬く間に社会に普及していった。

情報インフラの整備や情報通信機器の改良に伴い、インターネットは 1990 年代半ばから急速に普及することになるのだが、その進展には三つの大きな変化の節目があると思われる。まず第一段階としては、検索エンジンの開発が挙げられる。ウェブ上のデータは、その内部構造が HTML や XML 等のマークアップ言語でメタデータとして記述されているため、ウェブ上のデータファイルの集合はほぼそのままデータベースとして活用可能である。この活用を目的に開発されたのが検索エンジンである。当初は、「Yahoo! カテゴリー」に代表されるような索引を用いたウェブ版電話帳とも言える「ディレクトリ検索」が一般的であったが、その後キーワードを入力して関連ページをロボットにより検索させる「ロボット型検索」が主流となる。<sup>3</sup> ウェブ上のデータ量が増殖を続け、検索エンジンのプログラムがグーグルのページランク (PageRank) のようなウェブサイト評価指標アルゴリズムにより最適化されることで検索の精度が上がり、インターネットは「巨大データベース」としての機能が強化されて今に至っている。

---

2 村井 (1995: 42) によると、ARPANET は米国国防総省の組織のものであるが、当初からあくまで高等研究の一環として、コンピュータ・サイエンティストたちが研究するためのネットワークだったとのことである。

3 村井 (1995: 74) によると、Yahoo! はスタンフォード大学の学生が興味本位で行ったプロジェクトであったが、その後事業化されて広まったとのことだ。なお、Yahoo! JAPAN が 1996 年 4 月に開始した「Yahoo! カテゴリー」は 2018 年 3 月 29 日をもってサービスを終了し、22 年の歴史に終止符を打った。

二つ目の節目は、ティム・オライリー（Tim O'Reilly）が2005年の論文<sup>4</sup>の中で提唱したWeb2.0という集合知創出のための新たなウェブコンセプトに起因する流れである。Web2.0のアイデアがFacebookやTwitterに代表されるソーシャルメディアのアプリケーションとして具体化することで、それまでの送り手から受け手への一方向の通信から、送り手と受け手が流動化する双方向のコミュニケーションが可能となり、インターネットは巨大データベースから「ソーシャルメディアのプラットフォーム」へと進化を遂げた。ウェブ上での双方向コミュニケーションが一般化し、さらに若者を中心とする参加型文化（participatory culture）が活発になり、インターネットはUGC（User Generated Contents）を載せるCGM（Consumer Generated Media）として大いに活用されるようになり、ネット上での創作活動等のフリーカルチャーが大きく花開く。

第三の節目は、ウェブ環境そのものというよりも、ウェブ空間<sup>5</sup>と現実空間の関係の変容に関するものである。インターネットが普及し、情報通信機器の更なる改良やウェブ環境の一層の整備が進められたとはいっても、インターネット上のコミュニケーションや創作活動のような協働作業はウェブ空間という閉域で行われており、それが現実空間における物理的移動や人的交流に直接の影響を及ぼすことは少なかった。このように、ウェブ空間は現実空間から切り離された独立の「ヴァーチャル」な空間としてイメージされていたが、2000年代の後半からネット上のコミュニケーションや交流が現実空間での行動に直接影響を及ぼす社会現象が目につき始める。その萌芽といえる事例が、日本のサブカルチャーの一つとして注目を浴びたアニメ聖地巡礼である。これは、アニメの背景となった場所を突き止めてそこを訪問する観光行動であるが、2000年代後半にアニメ「らき☆すた」の聖地である鷲宮への聖地巡礼が地域振興へと結びつくことで社会的にも注目を集め、それをきっかけにアニメ聖地巡礼はアニメファンの中で大きな流行となり現在に至っている。サブカルチャーの世界だけではなく、社会運動や政治活動の領域においても、ウェブ空間でのコミュニケーションや交流が現実空間での行動を誘発する事例が相次いだ。例えば、2010年のチュニジアでのジャスミン革命に端を発する「アラブの春」も、ソーシャルメディアによるコミュニケーションが人々を現実空間における民主化運動へと直接導いた事象であり、翌2011年のオキュパイ・ウォールストリートの運動もソーシャルメディアによる交流なくしては始まらなかったであろう。その後、東アジアでの民主化運動やデモ活動、例えば香港での雨傘運動（2014年）や台湾のひまわり学生運動（2014年）、

4 O'Reilly (2005) を参照のこと。

5 『InterCommunication』に1997年から2000年まで連載された「サイバースペースはなぜそう呼ばれるか」という東浩紀の論考（東（2007）に収録）によると、インターネットというメディアを「サイバースペース（cyberspace）」、すなわちひとつの空間として捉える見方は1980年代に広まったとのことだ。小稿では、現在のインターネットはWWWシステムがその基盤にあることを踏まえて「ウェブ空間」と呼ぶことにする。

日本においても学生団体 SEALDs（シールズ）による国会前での安保関連法案に対する抗議活動(2015年)が続いたが、これらの活動への参加もマスメディアではなくソーシャルメディアを介したネット上でのコミュニケーションや交流がきっかけとなっている。ウェブ空間でのコミュニケーションや創作活動などの交流が現実空間に影響を及ぼす事象を、筆者は「拡張現実」という概念で説明を試みてきたが<sup>6</sup>、「もののインターネット（IoT: Internet of Things）」を支える情報テクノロジーの開発が進められる中で、まさに今ウェブ空間と現実空間の融合がかつてない規模で推進されている。

2000年代後半から始まったこの大きな社会の変容は、メディア等を通じて社会に共有され、それを受けて国や企業も新たな社会状況に対応すべく近未来を見据えた政策提言や商用サービスに着手しはじめている。例えば日本においては、2016年1月に閣議決定された「第5期科学技術基本計画」の中で、産業とICTが結びつくことで科学技術イノベーションが起こり、現在の情報化社会がウェブ空間と現実空間（上記報告書はそれぞれ「サイバー空間」と「フィジカル空間」と呼ぶ）が高度に融合した「超スマート社会」（Society 5.0）へと移行することを前提に、情報メディアや観光等の分野でさまざまな具体的企画が提案され、実際にすでに推進されている取り組みも多い。また、IT系企業と自動車メーカーが合同で、IoTおよび5G（第5世代移動体通信）時代におけるAI搭載のスマートカーを活用した新たなモビリティ・サービス（MaaS: Mobility as a Service）事業に着手し、多くの関連企業が参加するコンソーシアムも設立されている。<sup>7</sup>

国の産業政策や企業の商用サービスの推進を通じて、ウェブ空間と現実空間の融合はさらに進むと思われるが、小稿で取り上げたいのは、メディアが盛んにとりあげる産業構造の変革によるイノベーション創出や近未来の先進的消費サービスの可能性ではなく、この情報メディア環境の激変が私たちの社会的行動にどのように影響し、ひいてはそれが私たち自身、つまり人間主体の在り方にどのようなインパクトを与えるのかという問題である。

#### 4. ウェブ空間の肥大化が社会にもたらす影響

本節では、現在の情報メディア環境が内包するリスクに焦点を当て、そのリスクが私たちの社会にどのような負の影響を及ぼす可能性があるかを論ずる。議論を先取りして述べると、インターネットの普及やウェブ空間の整備により、私たちの生活はより便利になったものの、現在の方でウェブ空間の肥大化および現実空間との融合が進展すると、私たちの社会、あるいは私たち人間にとって極めて重要なある種の「自由」が知らず知らずのうちに失われてしまう危険性を指摘したい。

6 山田（2013, 2017）を参照。

7 日本経済新聞の記事、「トヨタ・ソフトバンク「MaaS」新会社、ホンダ・日野も資本参加。」（『日本経済新聞』2019.3.28 夕刊）を参照のこと。

インターネットは、その黎明期においてはまだマスメディアが全盛であったこともあり、国や主流メディア等の権力による支配や抑圧を回避しながら、自らの手で自由を獲得しようとするものたちにとっては福音だった。インターネットは、そのような中で、ハッカーたちが自由に協働しながらプログラムを作りあげるコモンズとして機能していた。実際、そういった土壌から GNU/Linux に代表されるオープンソース運動が立ち上がり、憲法学者のローレンス・レッシング（Lawrence Lessig）の主導のもと著作権の一部を開放するクリエイティブ・コモンズの仕組みが生まれ、それが現在のネット上の自由な創作活動を推進するフリーカルチャー運動へとつながり、ウェブ空間では新たな参加型消費文化が花開いた。

しかし同時に、より高速な通信を可能にする情報インフラの整備やスマートフォン等の情報通信機器の進化により、インターネット上を流れる情報通信量が爆発的に増加するのに伴い、肥大化するウェブ空間でのコミュニケーションが社会に大きな影響を及ぼし始め、インターネットの負の側面も次第に明らかになってきている。

本節では、インターネットの抱えるリスクを二つの観点、すなわちコミュニケーション（人と人）およびアーキテクチャ（人と環境）の観点から考察する。この考察の前提として、近年の情報環境をめぐる二つの大きな変化に注目する必要があると考える。まず一つは、情報流通量の爆発的増大である。インターネット上を流れる情報の量は 2010 年頃から急速に増え始め、Cisco Visual Network Index（VNI）の予測によると、2017 年度から 5 年間でさらに 3 倍増加すると予想している。もう一つの変化は、インターネット利用が PC から移動体通信へと急速に移行する可能性である。Cisco VNI の白書によると、PC のトラフィック（データ通信量）は全体の 41% を占めていたが、2022 年までには 19% まで落ち込み、逆にスマートフォンの使用によるデータ流通量は、2017 年の 18% から 2022 年には 44% に跳ね上がる見込みとのことである。<sup>8</sup> この二つの変化が組み合わさることにより、スマートフォンを活用したソーシャルメディアのプラットフォームとしてのインターネット利用が加速し、そこで動画も含めた大容量のマルチメディア情報がウェブ空間で流通することにより、インターネット上に膨大な量の個人情報が蓄積されていくことになる。これが今後、私たちにとってどのような影響を及ぼすのかについて、コミュニケーションとアーキテクチャの二つの観点から考えてみたい。

#### 4.1 「分断のメディア」としてのインターネット

第 3 節において、Web2.0 以降のインターネットがウェブ空間での交流を活発にし、

8 「Cisco Visual Networking Index（VNI）: 予測とトレンド、2017～2022 年 ホワイトペーパー」を参照のこと。下記の URL にて閲覧可能。

[https://www.cisco.com/c/ja\\_jp/solutions/collateral/service-provider/visual-networking-index-vni/white-paper-c11-741490.html#\\_Toc536227862](https://www.cisco.com/c/ja_jp/solutions/collateral/service-provider/visual-networking-index-vni/white-paper-c11-741490.html#_Toc536227862)

それがサブカルチャーや社会運動等の領域で現実空間における人々の行動を誘発する社会事象について論じた。これらの事例は、異質な他者（例えばアニメオタクと地元住民）を結びつける点、あるいは独裁体制から民主制への移行を目指しているという点で、メディア等での評価も肯定的なものが多かった。ただ近年、同じソーシャルメディアを介した匿名の他者同士の双方向コミュニケーションがマイノリティへの差別を助長し、現実空間におけるヘイトデモやヘイトクライムを誘発するケースが目につき始めている。双方向インターネットは趣味を同じくする匿名の他者同士を容易に結びつけるので、それがフリーカルチャー運動の推進にも大きな役割を果たしてきた。ところが、まさにその同じ双方向通信のプラットフォームが、同じ趣味嗜好、似かよった政治的バイアスをもつ人たちが排他的なトライブを形成する場ともなっており、それが現実空間において実際に排外主義の暴力として噴出しているため、私たちは今まさにこの負の状況にも同時に目を向ける必要がある。

憲法学者のキャス・サンスティーン（Cass Sunstein）は、すでに 20 年近く前のことだが、2001 年出版の *Republic.com*<sup>9</sup> においてインターネットが潜在的に持つ強力なフィルタリング機能が社会の分裂を生む可能性に触れている。彼は、MIT メディアラボの創設者であるニコラス・ネグロポンティ（Nicholas Negroponte）の主張を引き合いに出しながら、インターネット上では情報の取捨選択が容易となるため、自分用にカスタマイズされた「デーリーミー（the Daily Me）」（Sunstein 2001=2003: 27）という個人用情報通信パッケージを通じて情報を入手することができるようにと述べている。メディア社会を生きる私たちは、メディアを通して世界を眺め、それによってそれぞれの世界観を形成するが、世界の「覗き窓」が自分専用のデーリーミーだけだとすると、この世から自分と趣味や考えの異なる他者に殆ど触れないまま生きようになる。サンスティーンは、デーリーミーに代表されるフィルタリングが完璧な形で成立すると、異質な他者同士の相互理解が難しくなって社会は分裂し、その結果「過激主義や憎悪、そして暴力までも引き起こしかねないグループの二極化が進むことになる」（Sunstein 2001=2003: 64-65）と警鐘を鳴らしている。

サンスティーンは、このような分裂の現象を「集団分極化（group polarization）」という概念を用いて論じている。集団分極化とは、「グループで議論をすれば、メンバーはもともとの方向の延長線上にある極端な立場へとシフトする可能性が大きい」（Sunstein 2001=2003: 80）という考えである。インターネットは趣味嗜好を同じ

9 本書は 2003 年に『インターネットは民主主義の敵か』というタイトルで日本語に翻訳されており、小稿では邦訳を参照することとする。サンスティーンは 2001 年に *Republic.com* を著した後、そのアップデート版として 2009 年に *Republic 2.0*、2017 年に # *Republic* を出版している。小稿では、彼の基本的考えは 2001 年版の邦訳である『インターネットは民主主義の敵か』を用いて紹介し、必要に応じて 2017 年版の邦訳『#リパブリック—インターネットは民主主義に何をもたらすのか』を参照することとする。

くする人たちの交流を技術的に容易にするので、集団分極化はインターネット上でそのリスクが非常に高くなる。サンスティーンは、この現象は個人あるいは集団がネット上で情報の取捨選択をする際に、前述のデイリーミーのような情報通信パッケージを介して自らを「エコーチェンバー」(Sunstein 2001=2003: 80)に閉じ込めてしまうこともその一つの要因ではないかと主張する。

エコーチェンバーに閉じこもり反対意見を聞こうとしない人たちがフェイクニュースを信じてその情報を多くの人に広めることで「サイバー・カスケード」現象が発生し、最後には現実空間における暴力的衝突の引き金となる危険性もある(Sunstein 2001=2003: 199)。サンスティーンがすでに2001年に予言したリスクは、それから十数年が経過した現在まさに現実のものとなり、偽情報ももとでネット炎上が引き起こされ、それが現実社会に暴力や犯罪などの悪影響を及ぼしている事例は枚挙に暇がない。

サンスティーンがインターネットに内在する特性からフィルタリングによる分極化のリスクを指摘した後、イーライ・パリサー(Eli Pariser)がデイリーミーのアップデート版ともいえる「フィルターバブル(the filter bubble)」の概念を提唱し<sup>10</sup>、それがメディア等でも大きく取り上げられることで、インターネットの「分断のメディア」としての負の側面に対する認識が社会においても共有され始めている。<sup>11</sup>

#### 4.2 アーキテクチャの権力—規律訓練型権力から環境管理型権力へ

かつてジョージ・オーウェル(George Orwell)は小説『1984年』の中で監視社会を支配する「ビッグブラザー」が権力を行使する全体主義のディストピアを描いた。ビッグブラザーの権力は、ミッシェル・フーコー(Michel Foucault)が『監獄の誕生』においてジェレミー・ベンサム(Jeremy Bentham)が構想した「パノプティコン」という収容所形態を例に用いて述べたタイプの権力である。このパノプティコンという一望監視システムのもとでは、そこに収監されているものは常に看守のまなざしを意識せねばならず、囚人はそのまなざしを内面化することで権力に対して自発的に隷従するようになる。このような権力は、刑務所だけではなく学校や病院という近代システムに広く観察されるもので、一般に規律訓練型権力として知られている。

10 Pariser (2011) を参照。

11 フィルターバブルの懸念については、現時点では意見がわかれているようで、今後経験的な研究を通じて明らかにすべき課題である。笹原(2018:99-115)は、フィルターバブルが視野狭窄やフェイクニュースの拡散をもたらすのかどうかについて実証的な研究を紹介しているが、現時点ではフィルターバブルのリスクはパリサーの懸念ほどは深刻ではない可能性があると述べている。また、MIT Technology Review における記事 “Technologists are trying to fix the ‘filter bubble’ problem that tech helped create,” (Aug. 22, 2018) でもいくつかの実証実験が紹介されているが、ここでもフィルターバブル自体が分断を引き起こすのかどうかについて賛否両論があることが報告されている。



近代から現代にかけて近代的理念や価値が相対化されるにつれて、権力のかたちも規律訓練型からそれとはまた別なタイプへと移行してきた。東浩紀は「情報自由論」の中で、現代社会を「情報化とセキュリティ化」により特徴づけた上で、「万人が万人を監視し、情報を収集しあい、しかもその監視＝管理の実効力が技術的可能性に依存する社会空間から立ち上がり」（東 2007: 32）の際に生ずる新たなタイプの権力について論じている。<sup>12</sup> 彼は、これはもはやオーウェルが描いたように一人のビッグブラザーではなく、「無数の『リトルブラザー』たちが市民生活をたえず監視し、必要に応じて介入してくるような、より複雑で厄介な世界」（東 2007: 25）だと主張する。東は、Deleuze（1990＝1992: 356－358）の権力タイプの変化についての議論に依拠しつつ、それを Lessig（1999＝2001）によるインターネット時代における「アーキテクチャ上の制約」の議論へと接続することであらたな権力の特性を明らかにしようとしている。現代の権力は、レッシグの言うところのアーキテクチャによる管理、具体的には「個人認証と情報処理による環境管理を通した秩序維持」（東 2007: 49）により成り立っていることから、規律訓練型権力に代わる現代の新たな権力タイプを「環境管理型」<sup>13</sup> 権力と呼ぶことを提案している。

東は、規律訓練型権力から環境管理型権力への移行については、その後も大澤真幸との共著である『自由を考える』を始め様々な場で論じているが、小稿においても彼の権力の移行に関する洞察を踏まえた上で、この10年ほどの情報メディア環境の変化を視野に入れながら、とくにビッグデータ時代におけるアーキテクチャとプロファイリングの問題に焦点を当てて考察したい。

この問題を考える足がかりとなる身近なエピソードとして、2019年夏のリクナビによる内定辞退率販売事件を取り上げてみよう。2019年8月26日、政府の個人情報保護委員会は就職情報サイト「リクナビ」を運営するリクルートキャリアが学生からの同意なく「内定辞退率」の予測を企業に販売していたことが個人情報保護法違反に当たるとして是正を求める勧告と指導を行ったことが報じられた。内定辞退率をどのように予測していたかということ、2018年度に対象企業に応募した学生たちのリクナビ上の閲覧履歴と企業から提供された内定辞退の情報を突き合わせて分析し、学生の行動パターンから内定辞退の可能性を割り出してシステム化していたとのこと。そして、そのアルゴリズムを今年度の個々の学生に当てはめ、個々人の内定辞退の可能性を五段階スコアの形で企業に販売していた。もちろん、約8千人もの利用者のデータを本人の同意なく第三者に提供したとすると、それは明らかに個人情報保護法違反

12 「情報自由論」は、月刊誌『中央公論』（中央公論新社）に2002年7月から連載された論考である。ここでは、東（2007）に収録されたものを参照する。本論考は、サンスティーンやレッシグの研究と共に、ごく早い段階からインターネットの本質を見抜き、それが孕む問題を権力や自由の問題と結びつけて深いレベルで議論を展開している点で注目に値する。

13 東（2007: 49）によると、「環境」という表現はレッシグの「アーキテクチャ」を意識したものということだ。

であり大問題なのだが、それ以上に注目しなくてはいけないのは、この事件が個人情報を活用したランク付けビジネスの急速な展開の中の氷山の一角であるという点である。つまり、ネット上の個人情報を解析してスコア化する仕掛けはすでに存在していて、それを活用した商用サービスが当たり前のように稼働しているのである。リクナビの事件は、日本の個人情報保護法に抵触したため問題となったが、こういった法的制約を回避しながらネット上の個人データ収集し、AIで解析した上で個人をランク付けするシステムがすでに大きな規模で動き出している。

このシステムは「信頼スコア (credit score)」と呼ばれており、もともと米国や中国で始まった試みだが、最近日本のメディアも次々と特集を組むなどして、私たちの社会においても注目を浴び始めている。実際に、日本の金融機関や IT 系企業でもすでに同種のスコアを導入したところもある。一例を挙げると、2019 年 8 月、ヤフー株式会社が Yahoo! スコアという信用スコアを開始すると発表した。Yahoo! スコアは、ヤフーショッピング、ヤフーオークションやヤフークレジットあるいはサイト内の検索履歴などのネット上での個人々の行動を点数化し、信用スコアの度合いに応じて特典の付与や広告配信などに活用する仕組みである。ヤフーは、会員すべてを対象に事前通知なしにこのサービスに加入させ、希望しない会員は自分で加入を解除するという「オプトアウト (opt-out)」という方式を取ったのだが、これに対してネット上で批判が相次いだ。オプトアウトというまだ耳慣れない方式についての説明が十分に行われていなかったため、大きな騒ぎとなったようである。

ヤフーの一件をみると日本で信用スコアが普及するのはまだ先かもしれないが、中国では IT 企業アリババの子会社であるアント・フィナンシャルサービスグループが 2015 年に開発した「芝麻信用 (Zhima Credit)」等の信用スコアがすでに市場に浸透して、社会に大きな影響を及ぼし始めている。この信用スコアの算出基準については明示されていないが、学歴や勤務先などの身分、自家用車や不動産などの資産、クレジットカードの購入履歴、SNS での交流等の人脈、ネットショッピング等の消費に関する特徴など 5 つの観点から行われているようだ。この信用スコアが、お見合いなどの婚活において相手を選ぶ評価の基準となっているとの報道もあり<sup>14</sup>、中国社会にすでに広く受け入れられていることが分かる。

また中国においては、単に市場経済のレベルだけではなく、中国政府が主導する形で「社会信用システム」という国民の評価システムが 2020 年度までに社会実装される計画のようである。例えば北京市人民政府は、2020 年末までにこのシステムを稼働させ、北京市民 2200 万人全員のデータを収集して、行動や評判に対する表彰や懲罰を行うことを計画しているとのことだ。<sup>15</sup>

14 「個人情報格付け社会～恋も金回りもスコア次第！?～」(「クローズアップ現代プラス」

NHK 総合テレビ、2019.2.12 放送)

<http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4245/index.html>

15 朝日新聞の次の記事を参照。「北京市民を監視・点数化の新制度—移動やネット行動 処罰も」



中国や米国で推進されている信用スコアは、いずれ日本を含めて国際的な潮流になると予想される。この背景にあるのは、一つには私たちがPCやスマホなどでネットを利用すればするほど、私たちの個人情報がウェブ空間に雪だるま式に蓄積されるアーキテクチャ上の仕掛けである。私たちは今、ネットショップで買い物をしたり、飛行機や電車のチケットを予約したり、またソーシャルメディアでメッセージや写真を手軽に投稿する日常生活を送っている。このように私たちが受信したり発信したりする情報は、通信の履歴としてインターネット上に残り、それが個人情報として蓄積されていく。ビッグデータというのは、このように蓄積された通信履歴に関する大量の情報を機械処理し易いようにデータベース化したものである。また、ビッグデータとは「単なる個人データの集合体としての統計データではなく、その統計から導き出された、パーソナライズされ、カスタマイズされた情報」（宮下 2017: 46）でもある。そのため、ビッグデータを活用することで個々人の趣味嗜好に合わせたターゲット・マーケティングやダイレクト・マーケティングが可能となり<sup>16</sup>、それが大きな経済効果を生むという期待のもと、グーグルやアマゾン等（GAFA）の巨大プラットフォームと呼ばれる大手 IT 企業などは、拡大するビッグデータ市場のシェアを競いあっているところである。また、こういったビッグデータの活用は、商用サービスに限られず、すでに犯罪捜査や選挙活動等の様々な領域で用いられており、データの不正利用等が発覚した場合には大きな社会問題や政治問題となることもある。<sup>17</sup>

ビッグデータは、その活用の仕方次第では私たちの社会に様々な恩恵をもたらしてくれると期待されているが、一方でプライバシー権の観点からは今後大きな問題を引き起こす可能性も指摘されている。プライバシーとは「自分であるための権利」であり、「他人に害を与えない限り自分らしく生きることの権利」（スノーデン他 2017:67）である。法学者の宮下紘は、ビッグデータの時代においてプライバシーへの重大な脅威となるのは「プロファイリング」であると主張している（宮下 2017: 73）。彼は、プロファイリングを「特定の個人像を評価し、個人の労働力、経済状況、位置情報、健康、選好、信頼性、行動などを分析し、予測する目的で個人データを自動処理すること」と定義し、問題は「本人の知らないところで個人情報を基にその人

---

（『朝日新聞』2018.12.23 朝刊）

16 このように、様々な手段を通じて得た個人情報をデータマイニング等で分析し、個人の嗜好や行動パターンを把握することによって、選挙活動やマーケティング等において、個人をターゲットとする効果的な戦略を構築する手法は、「マイクロ・ターゲティング（micro targeting）」と呼ばれている。

17 近年生じた最も大きなものとしては、フェイスブック・ケンブリッジ・アナリティカのデータスキャンダルがある。英国のデータ分析会社ケンブリッジ・アナリティカ（Cambridge Analytica）（2018年5月に破産申請）がフェイスブックから性格診断アプリにより取得した8700万件ものユーザの個人情報を不正に入手し、それを利用して2016年の米国大統領選挙をトランプ陣営が優位となるようコントロールしたという疑惑である。

の人物像が造られ、そしてデータに基づきあなたの判断や評価が行なわれること」であると指摘する（宮下 2017:73）。もちろん個人情報をビッグデータ化して活用する際には、匿名化して「再識別化（reidentification）」（宮下 2017: 76）ができないように加工しなくてはならない。しかし、これが徹底されない場合は極めて大きなリスクにさらされるケースも予想される。例えば、遺伝情報がネット上の行動履歴のデータと照合させられた上で行動パターン予測等の目的で二次利用されるような場合、その情報が何かの機会に再識別化されて個人が特定される危険性もある。遺伝情報のように自分ではコントロールできない究極の個人情報が万一外部に漏れた場合、本人のみならず血縁者や子孫にも大きな影響を及ぼし、偏見や差別の温床ともなりかねない大問題となる。このようなビッグデータ活用が引き起こすリスクを回避するために、宮下（2017: 200）はネット時代のプライバシーは「ネットワーク化された自我を造形する権利」として考えることを提案している。<sup>18</sup>

ドゥルーズ＝東の言うところの環境管理型権力は、ビッグデータの時代に入り、その姿が次第に明瞭になってきた。私たちは、もはやウェブ空間から逃れて生きることができない。インターネットは消費サービスを充実させ人々の交流を活発化させてはくれたが、一方でこういったネット上の活動を通じて私たちは自ら個人情報をせつせと大量にウェブへと提供し続けている。このようにほぼ自覚のないまま提供する個人情報は様々に組み合わせられながらプロファイリングされ、それにより知らず知らずのうちにネット上には「データとしてのわたし」（鈴木 2007: 96）ができあがっているのである。その「データとしてのわたし」が、本来の私がいっているはずの自由をどのような形で抑圧するのかを次節で考察する。<sup>19</sup>

## 5. インターネットと自由

ビッグデータと AI によりプロファイリングが行われ、それを活用したターゲット・マーケティングにより個人々人へ向けて適切な情報が取捨選択の上で提供されると同時に、それを活用するユーザーの側でも自分専用の情報通信パッケージの構築を目指してフィルターバブルという「情報の繭」に閉じこもる。このような情報環境の中で、私たちは消費者として、確かに選択の自由を大いに謳歌することができようが、そこで同時にある種の自由が知らず知らずのうちに阻害されていることについて考えてみたい。

### 5. 1 キャス・サンスティーンの提案—ナッジ（nudge）による問題解決

まず、サンスティーンによる、インターネットと自由との関係を考える上で非常に

18 この権利を保証する方策の一つとして、（宮下 2017: 74）は EU データ保護規則の中で明文化された「プロファイリングに対する申し立ての権利」を挙げている。

19 「データとしてのわたし」については、山田（2011）において、黒崎（2005）と鈴木（2007）に依拠ながら「身体化」に関する議論としてまとめている。山田（2011）を参照されたい。

重要な二つの異なるタイプの主権に関する議論をみてみよう。サンステーンによると、デイリーミーやフィルタリングを賛美する人たちは「消費者の選択こそが自由の具現」(Sunstein 2001=2003: 34)という消費者主権を主張する傾向にあるとのことだ。彼はこういった自由市場を支える消費者主権に対して「自由国家の背景にある政治主権」というもう一つの主権概念を対置し、さらに「消費者主権は自治と自由を根底から揺るがすのではないか」という危惧を表明している。消費者主権を掲げ、選択の自由を極限まで推し進めて完璧なフィルタリングを目指した結果生まれるのがデイリーミーという私的情報通信パッケージ、あるいはフィルターバブルである。サンステーンは、このようなフィルタリングが私たちから奪うのは、「予期せぬ思いがけない出会い」(Sunstein 2001=2003: 29)である、と繰り返し力説する。サンステーンが「偶然の出会い」や「共通体験」を重要視するのは、それが民主主義の中核であり、その軽視は市民的自由の阻害につながるからである。つまり、サンステーンが守ろうとしているのは、共和制維持のための「自由言論のシステム」(Sunstein 2001=2003: 201)なのだ。インターネットにより消費の自由は進むが、まさにそれこそが他者との偶然の出会いの障害となってもう一つの自由である市民的自由を阻害し、その結果民主主義の基盤となる自由言論システムがないがしろにされる、というが彼の基本的主張である。

サンステーンのこの洞察は 20 年近く前のものであるが、近年それを踏まえた上で、偶然の出会いの機会をあえて生み出すための方策として、「ナッジ (nudge)」というコンセプトおよび仕組みの活用を提案している。<sup>20</sup> ナッジというのは行動経済学者のリチャード・セイラー (Richard Thaler) が提唱している概念で、サンステーンは彼との共著である『実践行動経済学』において人間の認知バイアスをうまく活用して人の選択をより好ましい方向へとやさしく背中を押してあげるための具体的な仕掛けを提案している。<sup>21</sup> サンステーンは *Republic.com* をアップデートした『#リパブリック』の中で「偶然の出会い」へとナッジするアーキテクチャ上の仕掛けの一例として、フェイスブックに「セレンディピティ (偶然の出会い) ボタン」をデフォルト、つまり初期設定として設けて、ユーザーが事前に選択していないニュースソースからの予期せぬ情報に触れるようにするアイデアを提示している (Sunstein 2017= 2018: 308)。

サンステーンは、いささか楽観的にも思えなくもないが、消費者主権を尊重しながらも、強制的にならないようにソフトにインターネット上での偶然の出会いをうながすナッジを活用することで市民的自由を維持できると期待しているようである。

20 “nudge”の辞書的意味は「注意を引くために肘で軽くつつく」という意味である。

21 彼らは自分たちの政治思想的な立場を「リバタリアン・パターナリスト」として位置づけている。あくまで人の自由な選択を尊重するという意味でリバタリアン的であり、また押しつけがましきではないものの、人の選択をある方向に促すという点でパターナリストであると説明する (Thaler and Sunstein 2008= 2009: 16-17)。

## 5. 2 コンヴィヴィアリティからコンティンジェンシー（偶有性）へ

サンスティーンの主張するように、ナZZを巧妙に仕組むことで自由な言論をかうじて維持することは可能かもしれない。ただ、小稿で議論してきたインターネットの肥大化とアーキテクチャによる支配は、私たち人間にとってより根源的とも言えるまた別のタイプの自由を抑圧することを以下で論じる。その議論の導きの糸として、まずオーストリアの思想家、イヴァン・イリイチ（Ivan Illich）のコンヴィヴィアリティ（conviviality）という概念をみていく。

イリイチは、今から 50 年近く前に学校や医療と言った社会制度（institutions）を批判的に考察し、こういった社会制度への過度の依存は、人間がこれまで維持しようと努めてきた価値あるものを失う結果となる、と警鐘をならした。イリイチは、それを「コンヴィヴィアリティ（conviviality）」ということばで表現した。コンヴィヴィアリティとは、「他者と相互に依拠し合う関係から得られるある種の自由（individual freedom in personal interdependence）」（Illich 1973: 11）のことである。社会制度や消費サービスへの期待の増大は、他者への信頼、他者への希望を痩せ細らせ、人に頼りながら自ら問題を解決する「自由」が結果的に抑圧されると主張する。そして、私たちの社会がこの自由を回復することが重要であると述べ、そのための方策として、彼が「コンヴィヴィアリティの道具（tools for conviviality）」と呼ぶ人と人を結びつける道具（例えば、電話や自転車など）の価値を見直すべきだと主張する。

インターネットも、誕生当初は「人と人を結びつける道具」としての活用に期待が寄せられていた。<sup>22</sup> イリイチの時代には、情報ネットワークはまだ今のように整備されていなかったが、彼は実は代表作の『脱学校の社会』<sup>23</sup>の冒頭で、制度化された学校教育から抜け出すための手段として、現在のインターネットを予言するような“educational webs”（Illich 1970: vii）の構想を提示している。インターネットは果たしてコンヴィヴィアルな道具となったかということ、すでにみてきたように、その黎明期は自由な協働を可能にするコモンズとして機能はしていたものの、近年は逆に、肥大化するウェブ空間等の影響により、コンヴィヴィアリティの基盤となるべきある種の自由がむしろ阻害され始めているのが現状である。

ソーシャルメディアが私たちの多様な関係を分断し、信用スコアが私たちの活動履歴を分析して格付けを行う環境管理型権力が支配する世界の中で、私たちは知らず知らずのうちに、私たちにとって極めて重要な、人間の本質と言ってもよいようなものを失いつつある、と筆者は危惧している。その何かとは「偶有性（contingency）」<sup>24</sup>である。大澤真幸によると、偶有性とは、『「他でもありうる」という可能性が留保されていること』（大澤 1996: 11）であり、「必然性と不可能性の双方の否定によって

22 例えば、古瀬・廣瀬（1996）を参照。

23 Illich(1970)の邦訳タイトル。

24 大澤（1996, 2015）、東・大澤（2003）にならい、ここでは“contingency”の日本語訳として「偶有性」を用いる。

定義できる様相（可能だが必然ではない）」（大澤 2015: 103）のことだ。例えば、私たちの生命いのちに関しても、「予期が及んでいない『他でありえた可能性』を潜在的に維持させる限りにおいて、成り立っている」（大澤 1996: 11）と考えるのである。サンスティーンが強調する他者との偶然の出会いが重要なのは、単に多様な意見に触れる機会を与えてくれるという理由だけではなく、このような出会いが私たち人間の本質ともいえる「偶有性」の感覚を想起させてくれる可能性があるからである。人間は、本来的に、このような偶有性に関わっている存在なのだ。ただ、社会の情報化や消費サービス化による経済合理性と引き換えに、こういった偶然の出会いの機会が次第に失われつつある。イリイチは、インターネット後のアーキテクチャの権力が明らかになる前に、社会制度による支配に対していち早く警鐘を鳴らし、コンヴィヴィアリティの回復を唱えた。コンヴィヴィアリティとは、先述のとおり「他者と相互に依拠し合う関係から得られるある種の自由」のことである。偶有性は、コンヴィヴィアリティが成立するために不可欠な要件であり、人間にとってより根源的な「自由」を意味している。私たち人間は、良くも悪くも、自分では制御できない偶然にさらされて生きざるを得ない存在である。運命の人との出会いに胸躍ることもあれば、不慮の災害で悲しみにくれることもあるだろう。ただ、このどちらも私たちが偶有性に関わっているからこそ体験できることであり、私たちはこの偶然の中においてこそ生きるリアリティを感じるのである。そして、私たちが偶有性を本来的に抱えざるを得ない存在であることを互いに認め合うことが、コンヴィヴィアリティという自由な連帯を自ら享受する感覚を育てるのである。

社会制度の整備や社会信用システムによりセキュリティが強化され、私たちが偶発的な暴力にさらされるリスクが低くなるのであれば、偶有性など犠牲になってもよいのでは、と主張する人もいるであろう。確かに、セキュリティの強化が偶有性の維持かというのは選択の問題かもしれない。ただ、少なくとも私たちはこれに努めて自覚的でなくてはならない。というのも、特に偶有性の自由は空気のようなもので、それが大きく侵害されるまでは、なかなか気がつかないものだからだ。

偶有性についてもう一つ重要な点は、これが私たち人間の他者関係の根源的欲求の一つと深く関係していることである。これについては、真木悠介の『気流の鳴る音』を参照しつつ別のところで論じたため、以下にごく概略を紹介するにとどめる。<sup>25</sup>

真木（2012）は、私たちが他者と関係する時に抱く基本の欲求には二つの相があると述べている。具体的には「他者を支配する欲求」と「他者との出会いへの欲求」の二つである。他者を支配する欲求（あるいは他者に依存する欲求）は、親子関係や師弟関係など安定的な人間関係が維持されるのを望む気持ちである。もう一方の出会いの欲求は、逆にそのような安定した関係のもつ閉塞感から逃れようとする気持ちだ。異質な他者との偶然の出会いにより、閉塞的な状況から自分を解き放ち、自明だと思

25 真木（2012: 192-195）および山田（2008）を参照のこと。

い込んでいた世界や自分自身の姿を「あたりまえではないもの」として認識しなおすことを欲する気持ちである。

さて、私たち人間にとって「他者との出会いへの欲求」が基本の欲求のひとつだとして、環境管理型権力が支配的な現代社会において、私たちが偶有性の自由を再び取りもどすための具体的な手立てとして、どのような試みが効果的であろうか。そのひとつとして、観光の旅が挙げられる。観光の旅には、予期せぬ出来事、偶然がつきものである。現代社会では、私たちの日々の暮らしの中にまでも制度化や効率化が進行し、そのシステムの網のなかで、私たちは自分の生命<sup>いのち</sup>自体が偶有的なものであることを忘れてしまいがちだ。ただ大きな災害が人の命を理不尽に奪う時、たとえば自分の身近な人が目の前で津波にさらわれる時、それを経験したひとはなぜそれが「彼」であって「私」ではなかったかを繰り返し問い続けると言う。その時、その問わず語りの中で抱くのが偶有性への畏怖の念なのだ。

観光の旅は、こういった体験をした方の話を偶然耳にする機会を与えてくれる。例えば、済州島や沖縄といったリゾート地を観光し<sup>26</sup>、この土地での過去の暴力や差別の歴史を偶然知り、それを体験した方から悲しみの物語を聴くこともあるかもしれない。他者との偶然の出会いの中で体験する偶有性にまつわる物語は、私たちの中に我々は「偶有性」という一点で繋がっているという深い共感の気持ちを喚起させてくれるはずだ。

## 6. むすびにかえて

共同通信の品川絵里は、大分県佐伯市沖合の大入島（おおにゅうじま）という住民680人ほどの島に、300人もの韓国人が訪れていることを報じている。<sup>27</sup>

大入島は、2018年3月にオープンした「九州オルレ」の新コースである「さいき・大入島コース」の一つとなっており、品川によると、このコースがオープンして以来、韓国からの観光客が団体客を中心に目に見えて増えてきたということだ。九州オルレというのは、九州各地で展開されている歩く観光の試みである。2012年に4コースがオープンして始まったのだが、きっかけは九州観光振興機構が2011年に韓国・済州島の「済州オルレ」と業務提携を結んだことによる。<sup>28</sup> 済州オルレというのは、済州島の各地に設けられたトレッキングのコースで、理事長の徐明淑（ソ・ミョンスク）氏がスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼経験からヒントを得て構想したものである。2007年9月の開始からコースも増え続け、現在では20以上の多

26 済州島には、次節で述べる「済州オルレ」というトレッキング・コースがある。これらのコースは、1948年の済州島四・三事件の跡地に重ね合わせられるように設けられており、「歩く観光」を通じて過去の悲惨な歴史に接することができる。

27 「住民680人の島に300人の韓国人が訪れて起きたこと—大分の離島、大入島の暖かさ」47NEWS、2019.8.19。

28 九州オルレについては、李（2019）を参照。



様なコースが用意されている。<sup>29</sup>

品川がこの記事で注目しているキーパーソンは、島の駐在所に勤務する荒金泰輔巡查部長である。大入島の島民たちは、島を訪れてくれる韓国人観光客に簡単な挨拶のことばでもかけてあげたいが、韓国語がわからずもどかしい思いをしていた。そのようななかで、ある時荒金巡查部長が韓国語を流暢に話せることを知った自治会の副区長が、佐伯署に「駐在さん」による韓国語講座の開設を依頼したそう。佐伯署はこの依頼を二つ返事で引き受け、2019年6月下旬から島の公民館で韓国語のレッスンが始まった。

荒金さんの今の目標は、10月に開かれる大規模なオルレのイベントで住民に韓国語を実際に使える手応えをつかんでもらうこと、そして韓国人観光客をことばによるおもてなしで驚かせることだと言う。

オルレを通じての人的交流などは他愛のない観光交流に過ぎず、政治情勢が悪化すればすぐに途切れてしまうものだ、とその効果について否定的な見解を持つ人もいるかもしれない。

2019年夏、韓国における徴用工訴訟への大法院の判決（2018年10月30日）に対する日韓両政府の対応に端を発する両国の政治的対立は、日増しに悪化の一途をたどっている。特に日本におけるメディアの韓国バッシングは異様なまでに激烈となり、ついには大手出版社・小学館の週刊誌である『週刊ポスト』が9月13日号で「韓国なんて要らない」というタイトルの「断韓」特集記事を組むに至った。これに対して、作家の柳美里氏は「人種差別と憎悪をあおるヘイトスピーチ」として非難、思想家の内田樹氏を始め多くの作家や研究者が批判の声を上げたため、同社が謝罪するという事態にまで至っている。現在進行中の社会現象でもあり、その詳細な分析にはまだ時間を要するであろうが、日本における現在の韓国バッシングは、ソーシャルメディアによる反韓／嫌韓言説をマスメディアが拾い上げて日本国内のアンチ韓国の感情を増幅させ、最終的に「集団分極化」が加速してしまった典型的な事例のように思われる。

政治と主流メディアが共犯的にあおり立てる国家間の対立に対抗するためには、たとえすぐに目に見える効果は期待できなくても、お互いに顔の見える形での草の根交流を辛抱強く続けることしかない。国の威信をかけた対立が暴力的事態へと悪化するのを避けるには、顔と名前を知ったもの同士が互いへの信頼と善意と希望を信じることをあきらめないことが重要であろう。見田宗介は「二千年の黙示録—関係の絶対性の向こう側はあるか」という短い論考のなかで、2001年の9.11テロ事件とその後米国が仕掛けた二つの戦争に言及し、なぜ「アフガニスタンやイラクへの戦争による子供たちの無残な死体と生き残った家族の悲嘆に、『かわいそうだが仕方のないこと』と考えるアメリカの多数の人々の感情」が米国で支配的だったのか、その理由

---

29 済州オルレについては、安（2019）を参照。

は「一人一人の自由な意思による善意とか思想の内容とは関わりなしに、絶対的な敵対の関係が成立」しているからであると述べる（見田 2012: 94-95）。この「関係の絶対性」<sup>30</sup>の問題は、見田が論ずるに、過去二千年に渡る文明社会で生まれた様々な思想が「解決し残した」難問だとのことであるが、私たちが未来へと向かうにはこの問題を避けて通ることはできない。国や歴史やイデオロギーの対立やそこから生じる憎悪ではなく、私たちが日々の暮らしの中で感じる喜びと悲しみ、歓喜と悲嘆のはざままで、偶然に翻弄されながらも、なおそこに見出そうとする他者への希望こそがリアルなのだと感じる心性を育み、それを社会のなかに根付かせるためには何が必要かを考えなくてはならない。

作家の池澤夏樹は写真家の本橋成一と共に、米国などによる 2003 年 3 月のイラク攻撃の直前にイラクを訪問し、そこで見聞きした体験をもとに『イラクの小さな橋を渡って』という小さな本を書いた。その一節を引いて、小稿を閉じたいと思う。

アメリカ側からこの戦争を見れば、ミサイルがヒットするのは建造物 3347HG とか、橋梁 4490BB とか、その種の抽象的な記号であって、ミリアムという名の若い母親ではない。だが、死ぬのは彼女なのだ。ミリアムとその三人の子供たちであり、彼女の従弟である若い兵士ユーセフであり、その父である農夫アブドゥルなのだ。

ミサイルを発射するアメリカ兵はミリアムたちの運命を想像しない。自分が世にも無関心な死刑執行人であること、無関心は冷酷よりも更に冷酷であること、100%無作為のこの一方的な死刑は 100% 誤審の結果であることを知ろうとしない。だが、彼女たちと出会い、その手で育てられたトマトを食べ、市場でその笑顔を見たばくは、彼女たちの死を想像してしまう自分を抑えることができない。（池澤・本橋 2003: 71-74）

## 【参考文献】

東浩紀, 2007, 『情報環境論集—東浩紀コレクション S』講談社。

東浩紀・大澤真幸, 2005, 『自由を考える—9・11 以降の現代思想』NHK 出版。

安殷周, 2019, 「済州オルレを通じたコミュニティービジネス」木村宏・下休場千秋 編『歩く滞在交流型観光の新展開』CATS 叢書第 12 号（北海道大学観光学高等研究センター）, 47-61。

Deleuze, Gille, 1990, *Pourparlers*(1972-1990), Éditions de Minuit.（宮林寛訳, [1992]2007, 『記号と事件—1972-1990 年の対話』河出書房新社。）

Foucault, Michel, 1975, *Surveiller et Punir, Naissance de la Prison*, Gallimard.（田

---

30 見田は（2012）は、「関係の絶対性」という考えを D.H. ロレンスの『アポカリプス』と吉本隆明の論考「マチウ書試論」に依拠しながら説明している。



- 村俣訳, 1977, 『監獄の誕生—監視と処罰』新潮社.)
- 古瀬幸広・廣瀬克哉, 1996, 『インターネットが変える世界』岩波書店.
- 池澤夏樹・本橋成一, 2003, 『イラクの小さな橋を渡って』光文社.
- Illich, Ivan, 1970, *Deschooling Society*. Marion Boyars Publishers.
- , 1973, *Tools for Conviviality*. Harper & Row, Publishers.
- 黒崎政男, 2005, 『身体にきく哲学』NTT 出版.
- Lessig, Lawrence, 1999, *Code and Other Laws of Cyberspace*, Basic Books. (山形浩生・柏木亮二訳, 2001, 『CODE—インターネットの合法・違法・プライバシー』翔泳社.)
- 真木悠介, 2012, 『定本 真木悠介著作集 I—気流の鳴る音』岩波書店.
- Meyrowitz, Joshua, 1985, *No Sense of Place: The Impact of Electronic Media on Social Behavior*, Oxford Univ Press. (安川一・高山啓子・上谷香陽訳, 2003, 『場所感の喪失(上)—電子メディアが社会的行動に及ぼす影響』新曜社.)
- 見田宗介, 2012, 『定本 見田宗介著作集 VII—未来展望の社会学』岩波書店.
- 村井純, 1995, 『インターネット』岩波書店.
- 大澤真幸, 1996, 『虚構の時代の果て—オウムと世界最終戦争』ちくま書房.
- , 2015, 『自由という牢獄—責任・公共性・資本主義』岩波書店.
- O'Reilly, Tim, 2005, "What Is Web 2.0: Design Patterns and Business Models for the Next Generation of Software," (Retrieved August 1, 2019, <https://www.oreilly.com/pub/a/web2/archive/what-is-web-20.html>)
- Pariser, Eli, 2011, *The Filter Bubble: How the New Personalized Web Is Changing What We Read and How We Think*. Penguin Press.
- 笹原和俊, 2018, 『フェイクニュースを科学する—拡散するデマ、陰謀論、プロパガンダのしくみ』化学同人.
- スノーデン、エドワード他, 2017, 『スノーデン—日本への警告』集英社.
- Sunstein, Cass, 2001, *Republic.Com*, Princeton University Press. (石川幸憲訳, 2003, 『インターネットは民主主義の敵か』毎日新聞社.)
- , 2017, *#Republic*, Princeton University Press. (伊藤尚美訳, 2018, 『#リパブリック—インターネットは民主主義に何をもたらすのか』勁草書房.)
- 鈴木謙介, 2013, 『ウェブ社会のゆくえ—〈多孔化〉した現実のなかで』NHK 出版.
- Thaler, Richard and Cass Sunstein, 2008, *Nudge: Improving Decisions About Health, Wealth, and Happiness*. Yale University Press. (遠藤真美訳. 2009, 『実践行動経済学』日経 BP 社.)
- 山田義裕, 2008, 「他者と出会う—支配の欲求から出会いの欲求への転回」石森秀三編『大交流時代における観光創造』大学院メディア・コミュニケーション研究院研究報告叢書第 70 号(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院), 249–266.

- , 2013, 「『拡張現実』の時代のコミュニケーションとツーリズムの新たな可能性」『観光創造研究』No.9（北海道大学観光光学高等研究センター）, 1-10.
- , 2017, 「拡張現実の時代における『他者との出会い』に関する一考察」石森秀三・西山徳明・山村高淑編『観光創造学へのチャレンジ』CATS 叢書第 11 号（北海道大学観光光学高等研究センター）, 39-46.
- 李唯美, 2019, 「日本におけるオルレの推進について」木村宏・下休場千秋編『歩く滞り交流型観光の新展開』CATS 叢書第 12 号（北海道大学観光光学高等研究センター）, 69-85.

### 【謝辞】

本研究の一部は、2019 年 7 月 20 日に広島国際会議場で開催された国際シンポジウム「HIROSHIMA とピース・ツーリズム」での講演に基づいている。同シンポジウムの参加者の質問およびコメントから本テーマについて貴重な示唆を受けたことに対して、ここに謝意を表する。

なお、本研究は JSPS 科研費 JP17H02248 の助成を受けたものである。



# 高見敏子先生業績と近年の活動一覧

作成：土 田 映 子

## 【注記】

高見先生の業績一覧作成にあたっては、以下のソースを参照して把握できた範囲で情報を収集しました。完全なリストではないことにご留意ください。学術論文とその他の著作の区別はせず、一律に年代順に記載しています。また、高見先生の近年の諸活動についても (3) の資料よりまとめてあります。

## レファレンス一覧

- (1) 石川慎一郎・石川有香・後藤一章・田中省作・田畑智司・中尾桂子 (2019) 「言語研究と言語教育に統計をどう活かすか—高見敏子氏の研究から考える—」『統計数理研究所共同研究リポート 414 言語特性の量化によるテキストの探索的・検証的分析』169-182.
- (2) 北海道大学学術成果コレクション HUSCAP (<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/index.jsp>)
- (3) 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院事務局総務係に高見先生から提出された「業績等自己申告票」2015年12月・2016年5月・2016年12月・2017年6月・2017年12月・2018年6月分
- (4) researchmap (<https://researchmap.jp/>)
- (5) Google Scholar (<https://scholar.google.co.jp/>)

## 【業績一覧】

- 高見敏子 (1996) 「イギリスの高級紙と大衆紙—語彙の基礎的観察」『英語コーパス研究』3, 95-104.
- 高見敏子 (2003) 「『高級紙語』と『大衆紙語』の corpus-driven な特定法」『大学院国際広報メディア研究科言語文化部紀要』(北海道大学) 44, 73-105.
- 高見敏子 (2004a) 「ソフトウェア紹介 Simple Concordance Program」『英語コーパス研究』11, 199-213.

- 高見敏子 (2004b) 「特徴語の特定法—英・米・豪の新聞英語における語彙比較への応用」 *The Northern Review* (北海道大学) 32, 31–66.
- 細川敏幸・小笠原正明・西森敏之・岡部成玄・野坂政司・安住和久・高野伸栄・渡邊智・高見敏子・伊藤直哉・川村武 (2004) 「e-Learning を大学教育にどう展開するか：e-Learning 研究会報告」『高等教育ジャーナル』(北海道大学高等教育機能開発総合センター) 12, 173–182.
- Takami, S. (2004). A Corpus-driven identification of distinctive words: ‘Tabloid adjectives’ and ‘broadsheet adjectives’ in the Bank of English. J. Nakamura, N. Inoue, & T. Tabata (Eds.), *English corpora under Japanese eyes*, 115–135. Amsterdam, Rodopi.
- 園田勝英・高見敏子 (2005) 「6 章：コーパスに基づく語彙研究」齊藤俊雄・中村純作・赤野一郎 (編) 『英語コーパス言語学 (改訂新版)』121–143. 研究社.
- 高見敏子 (2006a) 「コーパスにおける出現頻度の高低と log-likelihood 統計量の関係」『統計数理研究所共同研究リポート』190, 15–24.
- 高見敏子 (2006b) 「使用語彙レベルと総語数による英語多読図書の読みやすさレベルの算出」 *The Northern Review* 34, 45–59.
- 高見敏子 (2007) 「英語における POS タグ分布の相関性：LOB コーパスを例に」『統計数理研究所共同研究リポート』199, 89–99.
- 高見敏子・原田真見 (2007) 「英語多読教材図書：『100 万語多読』の薦め」『北海道大学附属図書館報：榆蔭』126, 3–4.
- 高見敏子 (2008) 「統計的指標を用いて抽出した特徴語の妥当性の検証例：特徴語による英語の高級紙と大衆紙のテキスト判別の試み」『統計数理研究所共同研究リポート』215, 83–96.
- 高見敏子 (2009a) 「言語データと統計的検定に関する疑問—統計学の入門書でわからないこと」『統計数理研究所共同研究リポート』232, 1–10.
- 高見敏子 (2009b) 「語彙頻度と統計的手法：英国二大政党のマニフェストにみる特徴語」英語コーパス学会第 33 回大会シンポジウム「コーパスと統計で解き明かすポリティカルディスコース」発表資料 (2009 年 4 月 25 日、神戸大学).
- 高見敏子 (2010) 「カイニ乗検定の手順」石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 (編) 『言語研究のための統計入門』70–76; 本書添付 CD-ROM 収録「カイニ乗検定用 Excel ファイル」. くろしお出版.
- 高見敏子 (2012) 「Bank of English と British National Corpus における英国全国紙の POS タグ分布」 *The Northern Review* 38, 41–69. ※英語学論説資料第 47 号第 5 分冊に転載.
- 高見敏子 (2016a) 「計量的語彙研究におけるピアソンの積率相関係数利用の問題点：コーパスデータによる松尾 (1982) の指摘の検証」石川有香ほか (編) 『言語研究と量的アプローチ』116–129. 金星堂.

- 高見敏子 (2016b) 「BNC に見る英国の大衆紙と高級紙の形容詞」堀正広 (編) 『英語コーパス研究シリーズ第5巻: コーパスと英語文体』187-218. ひつじ書房.
- 高見敏子 (2017) 「14 章: 新聞・雑誌のスタイル」豊田昌倫・堀正広・今林修 (編著) 『英語のスタイル—教えるための文体論入門』166-177. 研究社.
- 高見敏子 (2018) 「[ 北大は新入生を歓迎する ] : 先生からのメッセージ」『リテラポプリ』(北海道大学) 44, 14.
- 高見敏子・浜井祐三子 (2018) 「北海道大学における英語多読多聴学習の 12 年の歩み」『外国語教育センター報告書 外国語教育における ICT 活用／自律的教育活動の発展』(北海道大学) 3-23.

## 【2015 ～ 2018 年の諸活動】

### 学会発表

- 高見敏子 「松尾 (1982) の指摘の検証—語彙の類似度とピアソンの積率相関係数—」統計数理研究所・言語系共同研究グループ公開セミナー「言語研究と統計 2016」(2016 年 3 月 15-16 日)
- 伊藤孝行・高見敏子 「『沖縄こども新聞』とそのことば」沖縄文化協会 2016 年度公開研究発表会 (2016 年 6 月 25 日、名城大学)

### 研究院内共同研究

- 高見敏子 (代表)・原田真見・浜井祐三子 「北大英語多読多聴授業支援システム Le-golis2 の開発と多読多聴学習環境の向上」
- 伊藤孝行・高見敏子 「日本言語史資料としての沖縄地域言語資料の文献整備に関する基礎的研究」

### 学内・部局内の委員会活動など (順不同)

- ・ 英語 II CALL 実施委員会委員長 (2014 年 10 月～2015 年 9 月)
- ・ 英語系委員 (2017 年 4 月～2018 年 3 月)
- ・ 北海道大学図書館委員会
- ・ 北図書館委員会
- ・ 高等教育推進機構運営委員会入学者選抜研究専門委員会
- ・ 成果公開委員会
- ・ 学生委員会
- ・ 外国語 CALL 専門委員会

- 外国語教育企画専門委員会
- 外国語将来構想ワーキンググループ
- 英語プログラム企画専門委員会
- 留学支援英語・CEPU ワーキンググループ
- 北海道大学英語英米文学研究会幹事
- 「眞崎睦子先生を偲ぶ会」企画担当
- 新渡戸カレッジ応援企画「英語多読マラソン」協力教員（「英語多読マラソンスター  
トアップガイダンス」講師、ガイダンス資料作成、新着多読教材の語数調査および  
レベル情報作成とデータ提供、教材一覧資料作成、ラベル作成用ファイルの提供ほ  
か）

以上

## 高見敏子さん業績一覧等の作成を終えて

土 田 映 子

高見さん自身が作成した記録から近年の諸活動を列挙する作業をする中で、その多様さと量に改めて考え込まずにはいられなかった。特に、2017 年度に英語系委員（英語科目運営の実務を科目責任者とともに担当し、翌年度の英語の時間割作成を行う）の重責を担い、任期終了とほぼ同時に入院となった事実は、その業務がなければ違う結果になったのかどうか、という答えのない疑問を呼び起こす。思い返せば、系委員から英語教員への毎年ルーティンで行われる諸連絡が、2017 年の夏以降は遅れがちになっており、高見さんからのメールにお詫びの文言を目にすることが時々あった。高見さんが仕事を熱心に、細部まで丁寧にやろうとするあまり時間がかかってしまうことが珍しくないのを知っていたために、またそういう状態になっているのだらうと思っていた。しかし、一方で責任感の強い彼女にしては「らしくない」状態でもあった。それが忙しさ以外の要因によるものだと、病の一報を聞くまで気が付かなかったのだ。

彼女と知り合う機会を得た人の多くは、研究や大学業務は彼女の豊かな活動の、大半ではあっても全部ではないことを知っている。それは彼女が、世の中に存在するもろもろの人間活動に関心を持ち、自ら関わっていかうとする積極性の現れだった。高見さんが密度の濃い年月を生きた、ということは、レファレンスの冒頭に挙げた統計数理研究所の追悼論文で整理された高見さんの研究活動の意義からも、また写真に記録された余暇活動の様子からも伺える。仮に、健康のために仕事やその他の活動の量を減らし、もっと休むべきだという意見があり、それに従ったとして、高見さんがより幸せになったかどうかはわからない。さまざまな活動をすること、その一つ一つに真摯にエネルギーを投入すること、それは高見さんという個性の生のあり方そのものだったからだ。

\*\*\*\*\*

2018 年の 5 月か、6 月であったか、高見さんがピンク色の箱を持ってわたしの研究室にやってきた。箱には「ファンシーはたおりき」と商品名が印刷されており、プラスチックの枠に毛糸を縦横に張って幅 15 センチ・長さ 30 センチの布が手織りで



きという手芸道具で、新品だった。

「自分で使おうと思って買ったんだけど、使わなかったから」

我が家の娘に、譲ってくれるという。

娘が小学1年生だった2016年のクリスマス、同僚の浜井祐三子さん、原田真見さんと一緒に、自宅でのクリスマスパーティーに来てくれた。その時にも、娘へのプレゼントとしてテグスにビーズを通してネックレスなどを作るキットを持ってきてくれたのだった。

ありがとう、と言って箱を受け取り、その後の言葉に詰まった。高見さんの行動が何を意味しているのか、彼女の手術後に同僚たちと見舞に行った際、本人が病状について語った内容から察しがついていて、励ましの言葉の場面でないことは明らかだった。

高見さんの顔を見るばかりのわたしに、彼女は何ともいえない表情で、無言のまま手を振った。

大学で高見さんに会ったのはその後、もう一度ある。7月11日の午後6時過ぎだった。日時がわかるのは、英語Ⅱ科目の担当教員グループにより、ティーチング・アシスタントの学生たちに日頃の感謝を伝えるための夕食会が企画されていた日だからである。わたしたちのグループは出かける途中で高見さんと廊下で出会った。高見さんは別の教員と立ち話をし、わたしは科目の代表者だったため、開始時刻が迫るのを気にしていた。高見さんの靴がとても大きく見え、履き口から細い両足首が出ていたことを憶えている。やっと皆が動き出した時、わたしは高見さんを振り返って面白顔を作ってみせた。薄暗い廊下で、彼女の反応はよく見えなかった。それが明瞭な意識のある彼女と顔を合わせた最後になった。

高見さんとは同じ大学院（東京大学大学院総合文化研究科）の出身で、在学時期も重なっているが、知り合ったのは2002年4月に北海道大学言語文化部（当時）に就職してからのことである。同じく総合文化研究科の元同僚で、先に北大に赴任していた浜井さんが在外研究に出ていた時期で、高見さんが北大初年度のわたしの実質的なメンターとなった。

2004年11月に奈井江町で行われた北海道大学教育ワークショップ（当時の高等教育機能開発総合センター主催。2005年発行の『高等教育ジャーナル』に報告書が掲載されている）に、部局から2名参加者を出すことになり、高見さんとわたしが行った。温泉のついた宿泊所での研修で、わたしたち2人は修学旅行生のようにはしゃぎっぱなしだった。一般的には、青春というのは範囲を広く取っても中学から大学生までの期間を指すものだろうけれども、あの時の高見さんとわたしは間違いなく「青春」していた。言いたいことを何でもばんばん言って、他の参加者をへきえきさせていたのではないだろうか。あの時なぜあんなに高揚していたのかは今もってわからないが、

高見さんとの特別な思い出になったことは確かである。

\*\*\*\*\*

フランシス・スコット・フィッツジェラルドの小説「グレート・ギャツビー」の終盤に、「友情とは相手が生きているあいだに発揮するものであって、死んでからじゃ遅いんだということを、お互いに学びましょうや」（村上春樹訳）という台詞が出てくる。この業績一覧等をまとめたことは、だから友情の証としては手遅れということになる。専門も異なり、もっとも近くにいたわけでもない自分が作業をして、追悼号にふさわしい完成度になったかどうかは心もとない。作業の結果に意義があるとしたら、高見さんはこのように生きたということを示すあまたの記憶や記録の一部について、ただ容赦なく過ぎていく時間の中に散逸するのを、微力ながら押しとどめようとする事への貢献だろうか。

本当にごく一部ののだということを再び噛みしめて、この稿を終えたいと思う。



## 高見敏子さんを悼む

浜井祐三子

高見さんへ

高見さんを悼む言葉をこの『ノーザン・レビュー』にどう紡ごうかと考えていましたが、いろいろと考えて、高見さんにお手紙を書くことにしました。私から高見さんへの、最後の手紙です。

高見さんが亡くなられて、早いものでもうすぐ1年です。この間、ずっと不思議な気持ちでした。高見さんは確かにもういないし、高見さんの研究室も既になくなってしまいましたが、どこかにいつも高見さんの気配を感じていました。多読の教材棚を見ている時（高見さんの遺したメモが今もたくさん貼られています）、三階の廊下で高見さんの朗らかな笑い声を空耳する時、誰かと高見さんの話をする時、何より、私自身が何かにつけて「高見さんがここにいたらなんて言うかなあ」「高見さんならどうするかなあ」と考えてしまう時、そこに確かに高見さんがいたように思います。

高見さんとは、本当に長いおつきあいでしたね。初めて出会ったのはお互い20歳くらいの時ですから、30年近く、友人として、途中からは同僚としても、一緒に過ごしたことになります。同い年でしたが、高見さんは私よりも半年お姉さんで、実際、長女でお姉さん気質の高見さんと、三女で末っ子気質の私で、実は姉と妹のような関係だったと今になって思います。出会った時、私の方が同じ学科の一年先輩でしたので、高見さんはいつも私を先輩として扱ってくれましたが、実は私の方が高見さんにずっと甘えていました。我が儘な私に、友人・同僚として辛抱強く接してくれて、本当にありがとうございました。

30年の間にできた、いろいろな思い出があります。学生時代、いろいろなことを一緒にしたこと。学部時代の友人5人で会津若松に女子旅したこと。高見さんの留学前に浜田山の喫茶店で何時間もおしゃべりしたこと。高見さんの留学中にバーミンガムで再会したこと。私が着任して半年後に高見さんの北大への就職が決まって、国際電話をいただいておしゃべりしたこと。イギリスから着任した高見さんを札幌駅で出迎え、一緒にお寿司をたくさん食べてお祝ったこと。私の友人夫婦がイギリスから来道した時、一緒に富良野岳、旭岳に登山したこと。多読指導法を高見さんに丁寧に教えてもらったこと。同僚としていろいろなお仕事に協力して取り組んだこと。一緒に過ごした長い時間、その時々の高見さんのいろいろな表情が蘇ってきます。

二人ともここ数年は忙しかったので、ゆっくりとおしゃべりする機会も少なくなっていましたね。皮肉なことに、ゆっくりおしゃべりする時間は、高見さんが病気になって、北大病院の病室にお見舞いに伺うようになってから久しぶりに持つことができました。高見さんが病と戦っていた半年間、私は改めて、高見さんがいかに勁（つよ）くて優しい人であるかを思い知らされました。自分が大変な時も泣き言を言わず、常に自分のことよりも誰かのことを考えて行動できる人。最後まで、高見さんはそんな人でした。

昨年の今頃（9月末）、病室を訪れた私に、高見さんが「お医者様からもうあまり時間がないと言われた」と打ち明けてくれたことがありましたね。あの時、高見さんが「私は北海道が好きで、北大に勤めることができてよかった。浜井さんと同僚になって、本当に幸せでした。」と言ってくれたこと、一生大事にします。仕事の上で意見を違えたこともありましたが、高見さんの友人として、同僚としての誠実さを疑ったことは一度もありません。あなたは、私の理想とするものをたくさん持っていました。

10月に高見さんが亡くなって、心に穴が空いたような気持ちでした。心を埋めるために読んだ何冊かの本の中に、高見さんにも縁のある旭川に関係の深い、作家の三浦綾子さんの本がありました。常に自分自身や親しい人の病や死に向き合ってきた彼女の言葉にはいろいろと慰められましたが、特に、大事な人を亡くした時、その人の生き方を自分の中に取り入れていくことで、その人を長生きさせることができる、という言葉が胸に残りました。

高見さん、今もう私にはあなたの長年の友情に感謝する以外のことは何もできないのだけど、あなたの誠実さ、勁さ、優しさを少しでも自分の生き方の中に取り入れられるような人間になりたいと思います。そうすることで、高見さんの存在を、少しでも長く、この世界に留めておければと思います。

さようなら。やすらかに、お眠りください。

# 北海道大学英語英米文学研究会会則

- 第 1 条 本会は北海道大学英語英米文学研究会と称する。
- 第 2 条 本会は会員相互の英語英米文学に関する研究および発表の促進を目的とする。
- 第 3 条 本会会員は北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院英語教育系教員とする。
- 第 4 条 本会はその目的を遂行するため以下の事業を行なう。  
1. 機関誌の発行（細則に関しては別に定める）  
2. 月例研究会  
3. 講演会その他
- 第 5 条 本会は他の同種学術団体と機関誌の交換その他研究上の連携をはかる。
- 第 6 条 本会の事務局は札幌市北区北 17 条西 8 丁目北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院（英語教育系）内に置く。
- 第 7 条 本会はその円滑な運営のため、互選による幹事 2 名を置く。但し、任期は 2 年とする。
- 第 8 条 別途、年会費を定め徴収する。

39 号担当編集委員

土永 孝

## 編集後記

☆The Northern Review 第 39 号をようやくお届けすることができました。第 38 号が二〇一二年の刊行ですので、七年ぶりということになります。この間、諸般の事情により、会としての活動は長らく停滞し、本誌の発行も遅れ、計画していた退職記念号の出版も断念することになりました。このことをまずお詫びいたします。

☆本来なら第 39 号の編集委員には高見敏子先生も名を連ねることになっていました。ところが先生は突然の病魔に冒され、二〇一八年十月十九日ご逝去されました。どんな仕事に対しても決して手を抜くことなく緻密に誠実に取り組む高見先生が、手がけられていた数々のことを最後まで見届けることも叶わず、あまりにも早くあの世に旅立たざるを得なかったのは、どれほどつくらく心残りだったことが、想像もつきません。この追悼号を捧げることによって、少しでも先生の無念さを和らげることができればと思うばかりです。

☆本誌は、前号から印刷出版に加えてオンライン公開も始めましたが、今回は、印刷版は必要最小限の部数にとどめ、オンライン公開のほうを主としました。入稿から組版、校正、PDF 出力、プリンタ出力までの工程をすべて Adobe InDesign を使って自力で行い、製本のみ印刷所の手を借りました。DTP のプロによる仕事ではないので、至らぬところが多々あると思いますが、どうぞご容赦願います。

☆本誌、および本研究会の今後については、これから考えていく所存です。  
(T・T)

THE NORTHERN REVIEW

第 39 号

2019 (令和元) 年 11 月 30 日 発行

編集兼発行者 北海道大学英語英米文学研究会

☎ 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 (英語教育系) 内